

# 書評

No. 45  
1976・11



選別機構としての大学 / 田中欣和  
現代心理学の苦惱 / 田中俊也

関大生協・組織部 書評編集委員会

# 書評 / 目次

No. 45 1976・11

明快な最初の言葉に / エルンスト



## 1 道 標

- 2 選別機構としての大学 田中欣和
- 5 現代心理学の苦悩 田中俊也  
「近代科学」—「実証主義」批判の視座

- 19 独占・財閥・大企業 訳 / 結城 良  
南開大学・経済研究所 編著  
『壟断・財閥・大企業』

■ わたしの研究ノートから

- 22 日中文化関係史の一面 (XXVII) 増田 渉  
——近世の中国と日本
- 28 詩の翻訳について (VI) 山村嘉己  
——酔いどれ船の出帆
- 33 新刊案内
- 36 お知らせ / 編集後記

表紙 / マックスフィールド・パリッシュ 「ハンブティ=ダンブティ」

題字 / 文学部教授・網干善教氏



総督の初作戦／マックス・フライルド・パリッシュ

現体制下での大学とは何か。——既にこの問題は語り尽されたかみえる。書評においても昨年来、展開してきた「大学院大学」構想批判の試行によって明らかにしてきたことである。

しかし、われわれは大学問題を自らの主体を捨象して安易に大状況的な抽象概念を前提としたところで語ることはできない。弾効の対象はまず自らの内に見いだされることによって、つまり、自らが受けてきた教育なるものの意味を自己史において把え直し、点検・検証する作業をもって告発の論理を構築しなければならぬ。

もとより、資本主義体制下においては、教育とは労働力商品の形成過程であり、資本の論理による人間の差別・選別機構としてある。われわれはこのことを日常生活次元での内なる意識の問題として把握してゆかなければならない。大学進学とは何であったか。大学を卒業すれば将来の生活が保障される。という生活意識そのものによって、差別・選別機構としての大学は矛盾を隠蔽するなかでア・プリオリ的な自明なものとして無自覚に受けとめられてきた。この幻想に支えられた意識は、労働者階級へのさらなる収奪としてある「授業者負担」原則の矛盾も容易に覆い隠しきるのである。さらには、この「大学を卒業すれば……」という生活意識こそが、大学に「行きたくとも行けない」者を下層プロレタリアートに固定せしめることによって、日本社会の重層的な差別構造を担っているのである。

われわれの受けてきた選別の教育体制によって切り捨てられた者に対して大学は明確に差別・抑圧の機関として存在している。そして、この差別的構造を支える補完物として先に述べたような日常生活での内なる意識があるのではないだろうか。大学を楽しく、という大学内を蔓延する体制内イデオロギーをわれわれはそれが腐臭を放つデマゴギーとなしえない点にある。

われわれは再度、再々度大学というものを内なる生活実感のなかで把えてゆき、それを支えている価値感・世界感への根底的問いかけを通して教育の侵略に向けた帝国主義的再編への批判的作業を進めてゆくものである。

## 選別機構としての大学

田中欣和



(一)

「あなたはなぜ大学に来たのですか。」とあらためて問われると口ごもる学生が多いようである。なんとなく、友だちもみんな行くし……という表情、ヤボな質問をという表情もしばしばみかける。

実際、都市中間層の家庭では、今日、大学進学は常識に近い。昭和五〇年度で大学・短大への進学率は三八・四％に達しているが、東京・大阪などの大都市圏では勿論、全国平均よりかなり高いし、中間層以上の家庭で育ち、普通科の高校で学んだ人のかんりの部分にとつては、「進学」はむしろ社会的強制と受けとめ

られているかも知れない。

だが、学問はどのような「常識」を自明のものとして、日常生活感覚をあらためて吟味してみようとするところからはじまる。生活実感を切り捨てるところではなく、それを対象化し、社会的文脈のなかにおきなおしてみようということである。

なぜ大学へ？ といった質問をやや組織的に行うアンケート調査のたぐいも少なくない。回答は多くの場合、(1)学歴型(就職や結婚のため)、(2)勉学型(知識・技術の習得)、(3)教養型(「教養」を身につけるため、「人間形成」のため……など)、(4)青春型(青春をたのしみたい)などに類型化される。(おおまかに

いうと(1)~(4)の順に多く、大学・学部の性質によってちがいもある)。

この種の調査も無益ではないし、分析してみるとけっこう面白いのだが、表面的な回答が出发点だし、あいまいさはなくならない。「知識・技術」は何のために学ぶのか、「教養」とは一体何なのか、つっこんで考えてみてから大学へ来るといふ人はむしろ少数派であろう。「自分のまわりでは進学するのがあたりまえになっているから来た。今すぐ就職するのはこわいような気もするし、つまらないとも思う。学生生活とやらはたのしみたいし、勉強も一応するつもりだ。そうしないとも就職にもさしつかえるだろうし……」といって大学生活にそれほど期待しているわけでもないし、全然期待していないわけでもない」といったところが多数派のホンネではないだろうか。こういう「あいまいさ」を非難してみてもはじまらないし、こういう感覚で入学した学生の少なからぬ部分が、その後、はっきりした問題意識なり目的意識なりを獲得していくこともたしかである。大学で「教育」がなされているとしたら、そうならなくては困る。

しかし、こういう、「あいまいさ」自体をしつかりみすえ、「大学へは行けたら行くのがあたりまえ」という常識の根源を確認しておかなくてはならない。それは私たちの社会における学歴身分制ともいふべき構造である。

大学は勉強するためのところだというタテマエはつきりしているし、「勉学型」の回答を選択する人々もたんにエエカッコウしているだけではないであろう。しかし、かりに関大なら関大が、これまで以上に密度の高い教育を保障するとしても、同時に「大学卒」と

いう資格は一切与えないという「改革」を行ったら、入学志願者は激減することはまちがいない。とすると「入学志願」というものは、そのかなりの部分が「進学」(スツンデ学ブ)欲求というより「卒業」(パスポートを得る)欲求ということになる。

実際、さまざまの「大学問題」の根源にこのズレがあること、その確認から議論ははじめられなくてはならない。

## (二)

「いい学校」ということばがあり、「学校差」というものが人々の常識のなかにある。だが、「いい学校」とは何が「いい」のか。世間の評判における「いい学校」が、教育の内容や密度においてすぐれた学校を意味していいことは明らかである。第一、後者ならば、その個人ごとに「いい学校」の意味もちがいがいそうなので、一義的なランキングなどできるわけもない。「東大が一番いい」という意識は、「卒業生の社会的地位が全体として高い」という事実の反映に他ならない。東大生は面接だけで採用内定しても、関大などには求人もしないという企業は多い。また「関大クラス」までは求人しても「それ以下」にはしないのだという企業も多い。そのような序列の一定の屈折をへた反映が受験雑誌などにあらわれる「難易度ランキング」となる。

O E C D (経済開発協力機構) が一九七〇年に日本へ派遣した教育調査団の報告費(邦訳「日本の教育政策」朝日新聞社刊)も、そのような構造について率直に指摘している。「一般の人々からみると大学には社

会的評価によるきびしい上下の序列がつくられており、高校は高い評価をもつ大学にだけ多く多くの生徒を送りてむかよって順位づけられている。また雇用主の多くは卒業生を彼らがどのような知識や能力をもつかではなく、入試の結果、どのような大学のどの学部に入學したかによって判断する。一八才のある一日にどのような成績をとるかによって彼の残りの人生は決まってしまう。いいかえれば日本の社会では、大学入試は将来の経歴を大きく左右する選抜機構としてつくられているのである。」このようなしくみのもたらす「重大なゆがみ」についても、この報告書はさまざまな角度から指摘する。「学生たちは実際の学習や習熟よりも受験技術にますます強い関心をもつようになってきたといわれる。」「年令別でみた自殺率は男女とも大学入試の年令層でもっとも高く、また男子の場合には、入学試験の結果が発表される三月の自殺率が年間を通じて最高となっている。」「入試成績の方が学問的能力の証明書として重視され、利用されるので、学生たちはともすれば、大学在学中に真剣に勉強しようという意欲を失いがちになる」……ライシャワー元大使をはじめ、この調査団のメンバーは別に「革新的」な人々で構成されていたわけではない。にもかかわらず、報告書は、日本の教育の現状へのかなりきびしい告発を

含んでいる。

このような「ゆがみ」をもたらず「受験体制」は、しばしば、「能力主義」と表現されるけれども、それもなくまでカキカッつきでいわれるべきであろう。入試自体は「ある種の能力」が人間の能力全体のうちのもっとも意味のある部分であるとはいえないし、現在の社会体制を前提にして、現在の支配階級にとつて

意味のある部分であるかどうかさえあやしいものであろう。前記報告書が指摘しているところでは、「入試成績と卒業後数年後の実際の職業的な専門的能力とのあいだに大きな相関があるという信頼しうる研究はまったくない。」「特定大学出身者は「頭がいいから出世する」という迷信といつてよい。

## (三)

では、どうしてこういうバカげた状態が維持されているのか。政府・与党・財界などの支配者たちの口からさえ、しばしば受験体制の害は指摘されるのであるが……。

いうまでもなく、それは私たちの社会での労働力のヒエラルキー的編成に対応している。かつてある財界人は高専制度にからんでつぎのように発言した。「企業というものには、将校・下士官・兵卒がいるものだ。中・高専が兵隊、大学率が将校とすれば、ここでやはり高専のような制度が必要だ。」(もつとも、現在では、大学卒の相当部分が下士官的位置にあるのだが)このようなヒエラルキー的編成は、人間の潜在的「能力」の分布に対応しているわけではないし、また、分業の上での技術的必然性にもとづいてはいるわけではない。アメリカのラディカル・エコノミストであるポールズとギンタスはいう。「利潤と階級的地位の存続という目的を同時に追求するためにあたって、企業の支配者は三つの直接的目的をみたそうとする——それらは補完的な場合もあれば対立する場合もある。つまり技術的効率性、コントロール、正統性の三つである。」「コントロールの確保という目的の達成が技術的効率性と

しばしば対立するものであることは多くの研究が示すところである。意志決定への労働者の参画、職務範囲の拡大、チーム労働の採用という方向をとることによって、生産性と労働者の満足感との大巾な増加が記録されているのである。しかし、効率性と利潤性とは当然別のものである。「ヒエラルキーの権限と教育水準を関連づけることがのぞましい理由は、学校教育水準が高ければ被雇用者は当面のしごとをより充分にこなすことができるか、教育程度の高い人々は権限を維持するのにふさわしい態度を示すから、ということだけではない。一、二種類の卒業証書によって象徴された教育成績が、現在の一般的な社会的価値観にしたがって、権限を正統化するからでもある。」(「アメリカ階級構造におけるIQ」邦訳・青木昌彦編著『ラデカル・エコノミックス』中央公論社・所収)要するにアメリカにおける「能力主義」はIQイデオロギーは、ヒエラルキー的企業を正統化することに、その主要な機能があると彼らはいう。「先進資本主義社会では階層化システムはわれわれのいう用語でいうヒエラルキー的分業制を基礎としており、巧妙に段階づけられた官僚制の秩序を通じて権力とコントロールがトップから下部にむかって放射状に働くことよって特徴づけられている。アメリカにおける経済的報酬と社会的威信の分配は企業でのヒエラルキー的分業の表現である。」

日本における「学歴主義」(中・高・大卒の差別分断と、個別大学間の格差構造との両方を含む)や「受験体制」も、これと同様に考えることができる。一定の職種や地位にもっともふさわしい潜在能力をもつものを選抜するしくみとして公教育が利用されているという以上に、支配の構造を維持し、労働力の差別分断を維持するということが自体に意味がある。企業にとりて、大学でよく勉強した人のもつ知識・技術が直接意味をもつのは部分的なものでしかない。たとえば秀才の技術者を多数あつめればそれに比例して利潤が上がるというものでないのである。「ほんとうは秀才はひとにきりていいのだ」と正直にいう管理者もいる。しかし、面白くても、面白くなくても、「やることになつてい」受験勉強にそれなりに適応できたものは企業にそれなりに適応できるであらうし、どうせ労働者を上下に序列づけるからには、学歴を利用するのは実質的に不合理であつても、形式的には「客観的に」やりやすい。

#### (四)

それにしても「入試体制」の弊害自体は、だれにとつても明白でありすぎるので、さまざまな「改善案」がくりかえし、提出される。永井文相のいう「富士山型から八ヶ岳型へ」つまり、東大・京大への偏重をやめるということもある。国立の一期校・二期校の区別をやめるといふこともある。このような「政策」に私たちはどの程度期待できるであらうか。結論的にいえば、これらは、大学間の格差構造に一定の修正を加えることはできても、それを廃止しはしない。まして、

学歴差別構造にもとづく競争体制を変更しはしない。一期校・二期校の区別をやめると―受験雑誌や週刊誌が敏感にとりあげているように、ある大学はたしかに「やさしく」なり、ある大学は「難しく」なる。(関大はおそらくいくらか「難しく」なる)しかし、東大・京大その他がいくらか「やさしく」なつたところで日本の教育全体がどれだけ「正常化」するというのだろうか。

「私学助成」はもっと大胆に要求し、獲得するのは当然である。しかし、現実にするに足らない私学助成は、私学のスクラップ・アンド・ビルド政策として機能しつつある。「スクラップ」されるのは、かならずしも教育的努力や個性において極端に他に劣っているからというのではなく、「ビルド」されるのは良心的私学だともいえない。現在、最高の助成額をうけているのは、マス・プロと株式会社社長の経営で有名であり、全共闘の激しい糾弾がおそらくもつとも「世論」の支持さえうけた某大学である。一方、助成を切られたり、減額されたりしているのは、たしかに金もうけ型経営、マス・プロと教職員の低賃金、無権利で知られるところもあるにはあるが、むしろ地方の新設校で、学生があつまらないといつたところが多い。教育的良心というより経営の成功度によって私学相互の格差は、はつきり拡大させられていくであらう。

政策に期待できないとして、個別大学では何ができるか。入試の内容の点検をはじめ、検討すべきこと、やれることからやるべきことはたしかにある。

しかし、前にみたように、受験体制の構造が、社会の階層化システムの全体とかかわっている以上、大学が個別にやれることは直接にはたいしたことはない。個々の大学が制度改革にふみ切るとき、必要なことは、現にある諸矛盾から眼をそらせず、大胆にこれまでの諸「常識」に挑戦することによって、ヒエラルキー的分業の構造とそれを支える価値観をゆさぶることはなかろうか。

(たなかよしかず  
文学部・助教授)

# 現代心理学の苦悩

●「近代科学」——「実証主義」批判の視座

田中俊也

## 目次

- I はじめに
- II 村上颯一郎の開いた地平
- (1)今日の「科学」の貧困
- (2)科学史の問題
- (3)聖俗革命と啓蒙主義
- (4)村上(一九七六)の地平
- III 実証主義批判
- (1)ニュートンからコントへ
- (2)コントの「三段階の法則」
- (3)コントの「諸科学の序列」
- (4)「進化」の概念
- (5)「実証的」とは
- (6)批判——「実証的」の重層構造
- IV おわりに

## I はじめに

謂わば政治とは、竊極のところ人間  
の病める部分に関する技術の総称に  
すぎず、それを本来あるべき正常な  
形に戻す制度の医師が必要なことは  
当然ながら、いま特別苦痛のない人  
に、お前も病気なのだ、顔を苦痛に  
ひんまげよ、と言ってみてもはしま  
らない。

——高橋和巳<sup>1)</sup>

「科学的な」ということばを聞いて通  
常われわれが抱くイメージは、積極的に  
捉えるならば、「正確」「厳密」「客観  
的」等であり、消極的把握では「冷酷」  
といった内容であろう。これに対して、  
「人間的な」ということばからは、ポジ  
ティブには「温和」ネガティブには「曖昧」等のイメ  
ージを抱くであろう。

他の諸科学同様に心理学における「近  
代」の指導理念は、ひたすら、上記の意  
味における「科学性」であった。科学的  
であるということはその学問の進歩性を  
意味し、進歩的な学問は人類の進歩に貢  
献する、という暗々裡な前提が近代諸科  
学(特に遅くなって個別科学として独立  
した心理学、言語学、社会学等)を導い  
てきた。ところが、ナチズム前後とも言  
うべき一九三〇年代に殆ど期を同じくし  
て、そうした諸科学に、方法論的大反省

の兆が現われ、その後も何等かの形で引き継がれてきた。今日、そうした動向は、個々の領域の研究者たちはそう呼ばれるのを拒否するかも知れないが、一般に「構造主義」へのパラダイム変換として捉えられている<sup>②</sup>。それは、より全体的な人間像へ迫ろうとする意志からして、具体的な人間存在の側から組み立てられたより「人間的な」科学たらしめている、と見る事ができる。

心理学の場合、その研究対象が「人間」であるという理由から、事情はさらに複雑であった。一体、人間を「人間的に」捉えるとはどういうことなのか。また、人間を「科学的に」理解するとはどういう意味を持つのか。こうした疑問（しかも最も重要な疑問）に納得できる解答を与えないまま、先に述べたように、矛盾した基本テーゼを隠蔽しつつ諸理論が妥協的に共存しているのが心理学の現状である。

事象の妥協的共存状態とは、コント（一八四四）の言うところの、混沌の状態である。この状況にあつては、真に有意義な行動を営むことはできない。

ただできることはと言えば、ヴェント以来、少なくとも一〇〇年近くわたって心理学データの蓄積が為されているのであるから、洩れのないデータが集まるその日のためにせつせつと実験、調査をする

ことであり、一方では実験を終えて夜中に、何とか方法論的に納得のいく体系がでないものかと模索するという、苦惱の日々を送ることくらいである。

しかしながら、その苦惱も絶望的なものでは必ずしもない。すなわち「混沌は去り秩序がめばえ」る道があるのだ。先ず、科学的に客観的に冷たい、人間的に温かい「曖昧」といわれわれの素朴なイメージをさらに深く考察していくこと。もう一つは、法則定立的な、楽観的な、所謂科学の進歩史観はどこからやってき

たのか、また、それは乗り越えなくてもいいのかどうか等を検討すること。これらいずれも、必要最大限のコンテクストの中で捉えることが重要である。

幸い、最近、私の心理学方法論の科学哲学的反省の直接の契機となった村上陽一郎氏が「近代科学と聖俗革命」という著書で、積極的に心理学を探りあげておられるので、書評も兼ねてこの村上（一九七六）に言及しつつ論を進めていきたい。

## II 村上陽一郎の開いた地平

村上がフッサールに直接触れているのは村上（一九七六）二六〇ページに僅かに見出される程度である。にもかかわらずその発言は、動機においても内容においてもフッサールの後期思想（「危機」書によって代表される）との驚くべき一致点を多く持っている。フッサールが数

学から始めて、当時の西欧諸学の方法論的反省を為し、さらには近代理性性の反省から現象学的存在論をも準備した、という状況と、村上の「西欧」——「近代」——「科学」の綿密な反省によって開かれた地平とが相同性を持つということ

あればある程、フッサールの現代性を証明しているのである。

### (1) 今日の「科学」の貧困

村上（一九七一）<sup>③</sup>は、日本における今日の科学文明の行きづまりはその原因を科学技術の行きづまりに帰されがのだが、むしろそれが手本とした西欧近代科学の準拠枠（*frame of reference*）に求めるべきである、とした。その意味からしても村上の現今の諸発言は極めて今日である。

さて、その「西欧近代科学」を反省して村上（一九七一）は次のような点を指摘した。

「自然現象を分析すること、分析された要素の状態を詳細に網羅的に描き上げることによって、分析されな以前の現象を再構築すること、これを科学のあるべき姿であつて、それ以外の道は科学ではあり得ない、という立場が、近代西欧科学を築き上げる根幹の思想であつたけれども、その思想を先鋭化すればするほど、記述・描写されるべきものと現象から脱落してしまうことがらがあつた<sup>④</sup>」

この一文はすなわち、今日の科学の貧困と云ひ換えれば「科学」の意味の貧困であると述べているわけである。



## (2) 科学史の問題

村上(一九七六)は、科学がこのような状況に陥ったのは、科学史を、近代Ⅱ現代の科学者が自己の論理に有利なように、ある一つの模相だけを取り出して(先行理論との共約部分のみを發展させて)それ以外のものを捨て去ったところの結果でもって記述してきたためだ、と考える。あたかも当初から特定の理念で統一されていたかの如く記述された、「成り上がり物語」(success story)としての科学史が、科学から「意味」や「価値」の問題を擯棄して、瘦せ細った「科学」を造り出している、と主張している。これは科学史に限定されない村上の「歴史」観と見うけられるが、私はむしろ歴史は「じつげ物語」(far-fetched story)と言いた方がより妥当だと思ふ。

## (3) 聖俗革命と啓蒙主義

先の「特定の理念」が何であるかについてフッサールは「危機」書の中で、ガリレイによる自然の数学的理想化である、としている。すなわちガリレイ以後、科学者にとって世界は、「それ自体において数学と数学化された自然科学からとり出された合理性という、新しい意味での合理的な世界」<sup>⑨</sup>であらねばならなくなり、世界がそうであることは暗々裡の前提となっていた。

現象学のコネクタストでは、「ガリレイ以後」というように近代科学をフッサールの時代まで連続して捉えるが、村上(一九七四)<sup>⑩</sup>は、近代科学の出発点が数量的取り扱いであったとだけ考えることに異論を唱える。

われわれの「数学」についてのイメーヂは、受けてきた教育のために、非常にトゥウヴィアルな、受験問題を解くための技術的な、その問題を解くことが趣味となつた者には他の何よりも面白い、逆に現実的な諸問題(一九七〇年前後の所謂大学紛争等)に関わらざるを得ない者たちにとってはそうした連中は批判の対象となつた、価値の問題に関しては何等語り得ないものとしての「数学」であった。したがってフッサールが「ガリレイによる……」<sup>⑪</sup>と言ふ時、本人の思索過程を無視すれば、それは数学的世界の記述によつてすなわち諸記号の総体的記述によつて今日の状況に陥つたのだ、と

一七世紀までの世界の数学的構造論と、フッサールの時代をして今日の「知」の危機的状況論との間は連続ではなく、まさしく「共約不可能」なのである。

村上(一九七三)<sup>⑫</sup>は科学史におけるこうしたカタストロフ(破局)を超越する視点として、キリスト教を鋭く反省している。ここではまず、西欧近代科学は中世を支配していたキリスト教信仰を否定することを始めて始まった、という印象の誤謬を指摘し、実はキリスト教の一面が、今日否定されるべき対象となつた「近代合理主義」そのものであることを次の三つの点から論証している。

第一に、キリスト教的発想の内部の、自然が神の作品であり、人間が神の似像としての神の理性の模型であるとすれば、与えられた理性を駆使して自然界に内蔵される神の意志と理性の顕現である、自然の合理的な秩序を理解できないはずはない、という「理解可能性」の問題。少なくともニュートンまでの段階(当然ガリレイも含む)はこのレベルで留まっていた、とする。

第二に、そうして理解され、蓄積された人間の知が、人間の棲家として与えられた自然をより良く改良していくという「自然支配・制御」の問題。

第三に、キリスト教的時間構造における「救済史観」の問題。

この「理解可能性」「自然支配・制御」「救済史観」いずれもが啓蒙主義の時代になって意味上の大変革を起こすようになってくる。その引き金となるのが所謂聖俗革命である。

聖俗革命とは、知識の意義価値における聖構造から俗構造への転換を意味し、換言すれば、多くの選択と可能性を孕んだ多様性の時代からある一価値的なものへと凝縮した一様性の時代への移行のことである。また、知識の担い手が、ある特別な意蘊<sup>⑬</sup>によつて神の理性により近い理性を持った人々から、原理的にはすべての人間に移り行くことである。

村上(一九七六)は、ガリレイやニュートン等一七世紀の「科学者」は、自分たちが、自然の中にひそんでいる神の意志と計画とを自分たちの理性を使って一つずつ白日のもとに露呈していくことを、神の栄光を限りなく讃美する一つの表現であると考へており、その意味で「科学者」は必然的に神学者であり、形而上学者であった、としている。かれらは、神に愛<sup>⑭</sup>でられた、選ばれた人々たちなのである。これは先の「理解可能性」のレベルに留まれていることでもある。

ところが一八世紀に入って事情は変わってくる。この時期には、自然についての知識が人間と神との間においていかなる位置を占めるか、という問いそのもの

が次第に風化し、神が脚上げされ、知識についての議論は人間と自然との関係のなかだけでなされるようになる。すなわち、神——自然——人間というコンテクストから自然——人間というコンテクストへの変換が行われることになった。ここに啓蒙思想の起源があるのである。

村上（一九七六）によれば、「啓蒙」(enlightenment, illumination, Aufklärung)とは本来「光を啓く」とことであり、その光とは、人間が自然的認識する際の、神から与えられた理性的な能力すなわち「自然の光」(Innen nature)であったのに、やがて光の源泉としての神自身が脚上げされて俗構造が形成された。そこから、先に見たキリスト教的発想の第二、第三の問題が「真理」を指す人間自身の理性の光によって顕在化してくるのである。すなわち、知識は誰にでも得ることができ、多くの蓄積された知識で自然を支配し、人類のドラマを導く主人としての人類自身が、科学理論の革新と政治的革命とで人類を至福のユートピアに誘い入れることができる、という精神が近代啓蒙主義によって吹聴されることになった。村上は、科学の進歩史観はまさにこのようにして形成されたのだ、と述べている。

その意味で啓蒙近代の科学知識を、始まったばかりの公教育の場で押しつけよ

うとしたコンドルセや、マルクスらの所謂科学的ユートピア思想も批判の対象となるのだが、慎重を期してか、村上は深くは言及していない。

#### (4) 村上（一九七六）の地平

啓蒙主義の典型的落としてきたる科学の進歩史観を如実に後世に残したものとして村上は、デイドロ、ダランベールらの手に成る『百科全書』（初版一七五一年）

を検討している。

聖俗革命によって知識の担い手は特定の人から原則的にはすべての人々に移った。そこで様々な地方の多くの科学者の知識を集めていくことが真理に近づく唯一の道であり、そうした機関を持つことがその国の科学の「高さ」を示すものとなり、イギリスのロイヤル・ソサイエティ（一六六二）、フランスの王立アカデミ・ド・シアンヌ（ルイ一四世期）等が

設立された。この一七世紀の知識収集機関の性格は先に述べられた通り依然「聖構造」を保っていた。

『百科全書』では事情を異にする。知識を集める、という活動そのものはロイヤル・ソサイエティ等と変わったものではないが、ヴォルテール等啓蒙主義者の洗礼を受けて、その理念は、「神即自然」という主張のなかに依然として明示的に含まれている「神」そのものを脱落

パレストリーナの教皇マルチエリスのミサ



#### パレストリーナの楽譜

パレストリーナ(1525-1594)のミサ曲に、自然科学体系の美しさをみることができ。ニュートンより100年前に、聖構造としての「自然」の秩序を把握していた、といえる。

させ、人間とつての知識は、人間が自らの感覚を通じて自然（外界）から取り込まれ、それを自らのなかで統合し、適合する過程以外のところには、一切の根元もルートもあり得ず、したがってさらに、真理とは、そういう形で取り込まれ構築された人間の知識と、自然（外界）との照合関係以外にはあり得ない（デイドロ）であり、そうして得られた知識の歴史は「バケツに水の溜る歴史であり、しかもバケツには、水のなかにそれがあつていく以上、知識はつねに漸増曲線を描いて増大」する歴史であり、啓蒙近代以前の「中世」はまさしく、あの素晴らしい「古代」と、この素晴らしい「光の世紀」すなわち「近代」との中間にあつて、「暗黒」「無知」な時代にほかならない（ダランベール）であつた。

この『百科全書』派のイデオは、後に見る所謂「実証主義」精神にことごとく対応するものであるが、ひとまずここで村上（一九七六）の開示した地平をまとめておくことにする。

村上が「成り上がり物語」としてではない科学史を再検討して発見したことは、一言で言えば「科学」ということばの「意味」の縮小化である。「はるかに豊富な可能性を孕んだ」七世紀の科学が、聖俗革命によって啓蒙主義を生み出し、その精神に従つて所謂科学の進歩史観が科学者、知識人の「学」の暗々裡の前提となつて、現代あらゆる分野の人々が共有している学問の——限定すれば科学の——行きつまりをもたらした、というのが村上の主張である。そしてここでさらに、それでは、と、安易に「反科学」を唱えたり、直ちに「東」に目を向けたりすることを戒め、「西歐」そのものの内に依然、突破口があるのではなからうか、という事を示唆している。すでにその点は村上（一九七三）にも見出し得る。そうした視点に立つて「人間」という、元来、心理学が扱つてきた研究対象を用いて科学史を見直したのが村上（一九七六）の後半の部分である。その論述を詳細に検討していくことは、少し専門的になり、本「書評」誌の意図にそぐわなくなると思われるので、別の機会に譲りたい。

ただ、心理学の歴史を、「人間」の概念の「縮小傾向」「拡大傾向」について、先のキリスト教的発想の第一の点から、「ギリシヤ的な世界図式のなかでは大まかに言えば「人間の拡大傾向」が成立し、キリスト教では「拡大傾向」「縮小化傾向」との両面性があり、近代科学精神はデカルトをそのきっかけとして「縮小化傾向」を強力に志向し、結果的に「我」へと人間を収斂させてしまつた」と述べ、その「人間」の「我」への収斂が、近代啓蒙主義的科学観と結びついて「客観的」科学たらんとする今日の心理学の諸問題を引き起こしているのだ註・この文の後半部分は私の解釈による記述）としている点はまさしく村上（一九七六）の主張の真髄であると同時に、私の問題意識の中心を為すものである、ということだけは明記しておく。

村上陽一郎氏の優れた論文・著書に言及することによって、苦悩の一部すなわち、科学の進歩史観はどこからやってきて、それはどう把握すべきなのか、という問題についての苦しみは少し取り扱はれた。しかしながらさらに現実的な問題、すなわち心理学研究における一つの素朴な信仰・換言すれば、実証的科学的客観的という図式への信仰について反省しなければならぬ。冒頭に述べた、心理学書における諸理論の妥協的共存状態——端的な例は、ウオトソンの行動理論とロールシャッハテストとが共存しているような状態——を、少なくとも共通理解の状態にまでもつていくためである。その手がかりに、所謂「実証主義」を求めよう。

### Ⅲ 実証主義批判

「批判」(Kritik)と云ふことは、「元来」「危機」(Krisis)等と同じく、ギリシヤ語における「分離する」を意味する動詞 *Kriain* に由来するものである。したがって「批判」そのものが、あるものを他から分離して新しい地平を切り開くという生産的な面を持つていなければならぬ。

われわれの時代精神の典型であつたと思われる「批判」精神、実はそれは、教師とか学校とか受験体制とかの批判すべき対象は明確でありながらそれをどう方向づけたら良いのかという視点を欠いた、反抗にすぎなかつたのではなからうか。

実証主義批判に當つての私の視座は、これまでの流れからして明白である。

『はじめに』で述べた、現在、心理学に携わる者の苦惱の一部は、村上陽一郎の近著を通してある程度取り扱われた。したがってここではさらに複雑な問題、すなわち実証的・科学的・客観的という図式について検討し、われわれの素朴なイメージによる方法論上の混乱を超越する手だてとしての「共通理解」を求めることを目論む。

今日の「実証的」科学の類廃は、その実証精神が、瘦せ細った「科学」を受容することから始まる。

(1) ニュートンからコントへ

ニュートンの偉大さは、天上の力学を通して人類に一つの、決定的な思考のパターンを準備した点にある。それは「針小棒大の発想」とでもいうべき発想の妥当性について、理論的、経験的な根拠を与え、以後の人間精神を確実に導いてきたかようである。それは主著の一つ『プリンキピア』（初版一六八六年）第三部の冒頭の四規則に見事に集約して書かれてある。

規則Ⅰ 自然界の事物の原因として、

真実でありかつそれらの諸現象を説明するために十分であるより多くのものを認めるべきでは

ない。

規則Ⅱ したがって、自然界の同種の結果は、できるかぎり、同じ原因に帰着されねばならない。

規則Ⅲ 物体の性質で、増強されることも軽減されることもできない、実験によって見いだされる限りのあらゆる物体について符合するところのものは、ありとあらゆる物体に普遍的な性質とみな

されるべきである。

規則Ⅳ 実験哲学にあつては、現象から帰納によって推論された命題は、どのような反対の仮説によつても妨げられるべきではなく、他の現象が現われて、さらに精確にされうるか、それとも除外されねばならなくなるまで、真実のもの、あるいはきわめて真実に近いものとみなされねば

ならない。

このような諸規則から、世界体系の枠組みを規定しているのである。

「Ⅱ」で見た通り、ニュートンまでの自然科学者の行為を可能にしたのは、神の似像としての人間の理性への信頼であり、行為の連続を可能にしたのは聖書的秩序への素朴な信頼であった。事実、宗教の世界からの訣別の書と見られがちなこの「プリンキピア」に、「事物の現象するところより神に及ぶのは、まさしく自然哲学に属することなのです」というニュートン自身のことばが見上げられる。

ところが、ヴォルテール等フランス啓蒙主義者の手を経て、ニュートン力学が大陸に移植されると、事情は一変した。それは当時の、人間の理性による人間の支配をキリスト教による人間の支配に優先させるという、啓蒙君主制の国家体制にとって、神を語らなくても世界を語れる、という意味での、理神論としての重要な「教科書」となったのである。そしてその「俗構造」としてのニュートン力学がダランベール、サン・シモン等を経て、コントに到る。

コントはニュートンから何を学んだであろうか。

「あらかじめ十分に完成した新しい理論に基づいて、何らかの学問が再構成される時、まず一般の原理が生まれ



『百科全書』第一枚目の図  
このように農の営みからファッションまで幅広い事柄が図面と文字で説明されている。

検討され確立する。次に長い一連の作業があつて初めて、当初は誰も、その原理の発見者さえも考えつかなくなつたような整理が、その学問のあらゆる部分にわたつてなされるようになる。

このように、たとえばニュートンが万有引力の法則を発見してから、この法則から当然でてくるはずの学問的構成が天文学にもたらされるまでにはヨーロッパの幾何学者が繰出で、一世紀近く困難な作業が必要だつたのである。」「(「社会再組織に必要な科学的作業のプラン」)

ここにコントの二つの視点が見出せる。その一つは、彼が偉大な歴史哲学者であつたにもかかわらず、後に触れる、彼の打ち出した法則の根本的前提を、俗構造としてのニュートン力学の世界像すなわち自然の斉一性に求めている点であり、他の一つは、その下に構築された彼の理論は、その構成においては帰納が、構造において演繹が非常に重要な役割りを為していることである。

第一の点は以後追い追ひ検討することにし、まず後者を明らかにしたい。

「コペルニクス革命」以降、ベーコン、ガリレイ、デカルト、ホイヘンスを経てニュートンに到り、天体の特殊な運動、地上の物体の個別的運動原則から、地上と天上とを統合する運動の一般法則が帰

納された。ここではすでに、天文・物理学的法則は他の諸現象の研究方法を理論的に統一するという「統一原理」が十分に準備されており、コントはこの、天文学的に帰納された一般法則を土台にして具体的諸理論を演繹している。

すなわち、自然の斉一性、自然法則の不可変性という大前提——しかも言及する余地のない、「公理」とでも言うべき前提——から出発して「合理的予見」の論理を築いているわけである。

「自然法則の不可変性という原理が實際何らかの哲学的統一性を獲得しはじめたのは、やつと、真の科学的業績が一連の大現象全体についての合理的予見の原理の本質的正しさを示し得てからのことであつた。すなわちそれは、多神教の最後の数世紀間に数学的天文学が成立した結果として初めて、十分なものとなつたのである。この根本的教理は、こうして体系的に導入され、次いでおそらくは類推によつて、固有の法則がまた少しも知られていないようにならば複雑な現象にまで拡大されようとした。」(「実証精神論」)

コントの演繹体系における大前提は、彼の論理における「原因」であり、実証的研究にあつてはそうした「原因」に立ち入つてはならない、と次のように述べる。

「人間の知性の成熟期を示す根本的命題とは、本来いかなる分野についても決定不可能な、いわゆる「原因」を追求することをやめ、その代わりに「法則」すなわち観察された諸現象間の恒常的關係のみを追求することにある。

……人間は、それら事実の出現に特有の様々な相互關係を真に認識できるだけであり、それらの事実の発生の神秘に立ち入ることはできないのである。」(「実証精神論」)

このように、自己の論理体系の前提の真疑についての議論を禁止することによつて初めてコントの理論が成立することとなる。これこそまさしく村上(一九七六)の理解する啓蒙思想の「一面——真理の相対性、およびそこから派生する科学の進歩史観——」に他ならないのである。コントはそのから、公理系の数学体系におけるような「類推」を用いることを良しとする。

「適当な重要性を持ついくつかの現象に於いて確認されたことは、文句のない類推の力によつて、そのままその種類の現象全体に適用することができる。」(「実証精神論」)

ただし、ここで一言断られておきたいのは、コント自身が「外界には、人間の理解力が想定するほど、あるいは期待するほど強い結びつきはない」と言つてい

る点であり、それにもかかわらず「何事にも關係を見出そうという盲目的本能を持つ人間の知性は、同時的あるいは継時的な二つの現象を無理に結びつけようと、殆どいつでも身構えている」と述べている点である。すなわち、コント自身「針」も「棒」も同じ原理で解釈することへの危惧を持つことは持っていた、という事実である。

したがつて、「ある科学で用いられるものも他の方法は不可避的に他の諸科学にも適合する。したがつて諸科学は、それぞれが、いっそう専門的に研究する秩序の型のために、排他的にはないが、ある特殊な方法に特典的地位を与えよう」ということを別とすれば、もうもろの方法を無差別に使用することができる」といふ、諸科学における統一的方法の論理は「ニュートンとフランス革命との不幸な出会い」とでも言うべき、まさに時代の産物なのである。この辺の事情について清水幾太郎(一九七〇)は、コントの時代は二つの革命によつて規定されていた、と次のように見事に説明している。

「その一つはフランス革命であり、もう一つは産業革命である。前者は人間と人間との新しい關係の出発点であり、新しい關係の魂は、あるいは平等と呼ばれあるいは民主主義と呼ばれる。人間解放の過程の開始である。これに對

して、後者は、人間と自然との間の新しい関係であり、新しい関係は、あるいは技術と呼ばれ、あるいは産業と呼ばれる。いずれにしろ、人間が科学を武器として自然を征服して行く過程の開始である。」

コントはこうした、ほとんど崩れ去った古い秩序と、目ばえつつある新しい秩序とが共存する混乱状態に在った。しかもそうした、知的無政府状態とも言うべき攪乱状態は、非ペシミストたる彼にとつて快い享受どころか、どうしても何とかしなければならぬ重大な課題であった。そしてそこで発案されたのが、歴史事実を反省、帰納して得られた彼の「歴史的方法」である。混沌を形成している諸事象諸現象を、時間的な系列によって再構成して秩序を取り戻すというこの「歴史的方法」によって、有名な「三段階の法則」(「諸科学の序列」)ができた。

## (2) コントの「三段階の法則」

その「方法」によって導出された成果の一つが彼の「三段階の法則」である。「個としても種としても、人間の思索はすべて、必然的に三つの理論段階を順次通過する。すなわち、普通、神学的段階、形而上学的段階、実証的段階と呼ばれている三つの段階である。……第一の段階は、はじめはどう見ても

不可欠な段階であるが、その時期が終ればいつでも、まったく一時的な準備段階であると考えられる。

第二の段階は、第一の段階が崩壊して変形したものにすぎず、徐々に第三の段階へと導くための過渡的目的しか持たない。

第三の段階は、完全に正常な唯一の段階であつて、すべての分野における人間理性の決定的制度はこれである。」(「実証精神論」)

まず、第一の神学的段階においてはさらに、三つの形態に分けられる。すなわち、外部の一切の事物に人間と同様な一種の生命——生命があるということはある種の「靈魂」を認めることでもある——を付与する「拜物教」フュティシズム(「物神崇拜」)の形態から、本能と感情の後退したところに生じ得る、思索における想像の自由な展開の産物たる「多神教」の形態が生まれ、次に、理性の普通の自覚によって「一神教」の形態が現われる。(コントはこの内、「多神教」の段階の研究を重要視しているが最近、今村仁司(一九七五)はコントのこの三形態を一括して「コントのフュティシズム論」として捉え、マルクスの主義の立場から論じている。)「いずれの形態においてもその人間精神は、諸現象の起源、第一原因、生成因を、彼らにとって絶対的知識とな

るまで探ろうとしているわけである。徐々に自由な思考範囲が狭まっているものの、それらの中心は、勝手な「想像力」である、と次のように述べている。

「最初の諸観念を生み出すことができるのは、明らかに、その性質上長い準備を要しない哲学、一言で言えば、直接的本能の刺激だけを受けて、自然発生的に現われ得るような哲学でなければならぬ。その際、このように一切の現実的基礎を欠いた思索がどんなに空想的であつてもかまわない。これがその神学的原理のもつ幸せな特権である。」(「実証精神論」)

続く形而上学的段階は、コントが烈しく非難する段階である。「形而上学的段階とは、個人として、あるいは集団としての人間の知的發達に元来内在し、その幼年期と成熟期の間にある一種の慢性病である。」(「実証精神論」)

さらにまた、形而上学的精神が、「社会的活動としては無論のこと、知的活動としても『批判的』すなわち破壊的活動しか行ない得なかつたこと、何ら独特のものを作り上げられなかつたこと」の故に、形而上学は愚かな懷疑を彼の時代より二〇世紀も前に人々に引き起こさせた、としている。しかし一方では、思弁的部分すなわち推論が非常に広く行われるよう

になり科学に近づいた、とも認めており、この段階の両義性、曖昧性を指摘している。

最後の実証的段階に到つて初めて、人間の知性は、その完全な合理的な姿を現わす、とコントは述べる。この段階の人間精神すなわち実証精神こそ今回の批判の対象である。この段階の特徴はひとまず、自然の斉一性の確認とその下における不変の自然法則の確立、観察に対する想像の従属、自然法則に基づいた「合理的予見」という目的の科学への付与、ということにしておこう。

## (3) コントの「諸科学の序列」

コントはこの最高価値たる実証精神を広く、特にプロレタリアに対して普及することを目標に、従来の教育体系とは異なった、諸科学の新しい教育的配列を行った。(その意味でも、実証精神が完全なる「俗構造」を持つていることを確認しておきたい。)

それはまず、諸科学を、縦の相互関係に従つて各科学が先行の科学を基礎として後続科学を準備するよう配列する、所謂理論的依存関係によつて配列しても、實際の成立順序に従つて最古のものから最新のものへという、歴史的縁起関係に従つて配列しても、その順序は同じになつてしまふ、という根本原則を発見するこ

とから始める。これによって諸科学は、一般性、独立性の大ききの順、換言すれば複雑さの小さきの順に並べられ、後の方になればなる程具體的な人間存在（人類）との關係が密接になっていくように組み立てられる。次の通りである。

第一に諸学は、最高価値である社会学（社会学）とそれを準備すべきものとしての自然哲学とに二分される。

第二に自然哲学は、有機部門と無機部門とに二分される。

第三に無機現象は高い一般性、単純さ、独立性を有する故に、序列はまずこの部門から始められる。この部門は「最初から真に実証的な検討に耐えるばかりでなく、その諸法則は普遍的存在に直接関わりを持っている」から、生命体（有機部門）に直接の影響を持つ。その典型が天文学である。そして有機部門に生物学が据えられている。

第四に、典型的無機哲学||天文学と、典型的有機哲学||生物学を根本的に結びつける科学的、論理的紐帯として、合成、分解等の現象に関わる化学が両者の間に置かれる。

第五に、天文学と化学との間の重大な間隙に、「ガリレイ」によって初めて明確な存在を獲得した「物理学」を挿入し、この諸学の体系の根源的共通理性の出発点を、天文学よりもさらに実証的に完成さ

れた段階にある、「個人にとっても人類全体にとっても、合理的実証性の唯一の必然的揺籃となった」数学を置く。

このようにして「数学、天文学、物理学、化学、生物学、社会学という六つの基本的科学から成る、歴史的であると同時に理論的な、科学的であると同等に論理的な」一つの不動な序列を組み立てた。そうしてコントは、「各人の知性は、ほとんどそれとわからないような仕方、最も原始的な数学的觀念に始まって最高の社会的思维にいたるまで向上し、自由に実証的精神の全發展史をたどることが可能になる。」としている。ここでわれ

われは、知性が「原始的な数学的觀念」すなわち「数的思索」に起源を持つ、というコントの記述、および、ある科学は先行する諸科学に範を求めて成立してきた、という点を心に留めておかねばならない。そして、現代心理学の起こりを、フェヒナー（一八六〇）に見るにせよ、ヴント（一八七九年）に見るにせよ、現在われわれが言うところの「心理学」は、コントのこの「実証精神論」（一八四四）にはなかつたということ、否、もし見つけたとすれば、「生物学」の觀念の内に幸じて認め得る程度のものであつたことも、実証科学としての心理学を反省する上で忘れてはならない視点である。

#### (4) 「進化」の概念

さて、(2)(3)においてコントの主要学説を非常に簡単に眺めてきたが、その「三段階の法則」および「諸科学の序列」には、ある一貫した「觀念」が流れていることに気付く。彼は自らの哲学を「新しい哲学」と称し、次のように述べる。

「新しい哲学は、進歩の觀念を実践的、理論的な英知から来る真に根本的な教義として確立するとともに、人間性の改善のほうを人間の条件の改善より常に上に置くことによって、最も見全であると同時に最も高貴な性格を進歩の觀念に与える。」（「実証精神論」）

ここから、個人の發展と集団の發展との間の根本的同一性を、その歴史性（すなわち「發達」）に見出し、それらは持続や強度や速度のちがいはあつても、必ず互いに対応する諸相を呈す、という三段階説が出てくるし、歴史的發展の順序によって並べられた諸学の序列が形成される。たとえば、幼児の思考（フェヒンズム、「何故？」）の疑問に代表される「原因」への偏執）と未開人の思考と神学的段階。不完全な児童（様々な懷疑および破壊的作業への傾倒）と中世的社會と形而上学的段階。理想的成人（合理的予見可能）と起こりつつある近代市民社會と実証的段階。これらすべて個人と文明（人類）における進歩を前提している。

しかしながら、コントにおける進歩の觀念は曖昧でありかつ經驗的（歴史的）事実には必ずしもそぐわない、として反論し、さらに進歩について考察したのがスペンサーである。それはさらにダーウィーン（一八五九）により經驗的に立証されることになつたが、ここでは、前進化論者としてのスペンサーの理論に言及する。

スペンサーは、コントの哲学における進歩の觀念は、進歩の現象よりも進歩の付随物を含み、実体よりも影を含む、と次のように述べる。「一般に通用している進歩の觀念は目的論的である。すなわち、進歩という現象を人間の幸福との関わりにおいてのみ捉え、直接間接に人間論的幸福増大に役立つ変化のみを進歩と認める。しかもそうした変化は、人間の幸福増大に役立つという理由だけで進歩と見なされるのである。」（「進歩について」）

このあと続いて、進歩の正しい理解のためには、利害を離れて、進歩それ自体の本性が何であるかを研究して、そして種々の変化に共通な性格、すなわち法則の確定にこそ努めねばならない、と主張する。その意味でスペンサーは、個人的な「進歩の觀念」をより普遍的な「進化の觀念」にまで高めた、と言つて良からう。スペンサーにおける進化の觀念を整理して命題群に表わしてみると次の通り非常に明瞭になる。

- 一、自然は奇一である。
- 二、自然現象は同一の原因に帰すべきである。(これは先のニュートンの「プリンキピア」に見出せる。)
- 三、ただしその原因は、実在に求めることはできず、原因とは法則のことである。(ここでまさしく聖俗革命が起こっている。コントの論理構造を参照されたい。)
- 四、その法則とは、「能動的な力はすべて一つ以上の変化を生じ、原因はすべて一つ以上の結果を生ずる」という法則である。(A・ポルトマン(一九四四)において、生命体の最初の能動的な力は「胚」であった。)

と私は考えている。

(5) 「実証的」とは  
 コントは、「実証的」という、先進諸国民の「普遍的良識」によって形成されたことばの意味を、先の「諸科学の序列」「三段階の法則」「進歩(化)の思想」に共通な諸属性として次のように表わしている。すなわち、「実証的」とは、

- (I) 空想的に対する「現実的」
- (II) 無用に対する「有用」
- (III) 不決定に対する「確実性」
- (IV) 曖昧に対する「正確」
- (V) 否定的に対する「建設的」
- (VI) 絶対的に対する「相対的」

- 五、結果は心ず原因より複雑である。
- 六、複雑性の増加につれて安定性が減少する。
- 七、あらゆる種類の進化は、同質から異質への変化である。
- 八、進化は、偶然ではなく、人間が支配し得るものでもなく、情け深い必然である。すなわち、同質性は自然に異質性を増す。(自然淘汰の觀念)

このようにスペンサーは、進化の本質を同質から異質への変化、それに伴う安定性の減少、そして有機体の並行的変形(同質性への可逆性。多くの場合、レベルの変化を伴う。)と捉えている。これはまた、所謂「進化論」の本質でもある、

り正確であり、建設的であり相対的であることを要求する。

今日、「実証的」と言う際に起こる概念上の混乱(これが当然、知的混乱を引き起こすのだが)は、われわれが、コントの「確実さ」「正確さ」から「科学的」というイメージを造り出し、「科学的」

「客観的」という素朴な暗黙の了解を受け入れ、この「客観的」知識こそが「現実的」であり「有用」であり「建設的」である、と再びコントに戻ったのだが、その「客観的」知識の「絶対性」すなわち絶対的価値を信じて疑わずに来たことに由来する。そして、その結果としてわれわれの「学」の行為そのものが自己疎外を引き起こすという実証主義のネガティブな面と現実に対峙せざるを得ない、という問題状況に起源する。

混沌から恒久的秩序を編み出すはずであった指導原理が、一世紀半を経た今日、逆にさらに深刻な事態を、遠い東の端の小さな島国にまでもたらしてしまった。

(6) 批判——「実証的」の重層構造

混乱を避けるために、イデオロギーとしての「実証主義」——以下単に実証主義と記す——と、「実証的科學」「実証的研究」等接頭辞として用いられる際の、実証主義のイデオロギーは含むがむしろ、日常言語として頻用される「実証的」という

ことばとを区別することから始める。何故ならば、実証主義の、今日までの思想的反省は、われわれの置かれた危機的状況を認識するに留まらざるに對して、認識のレベルまで降りて、「実証的」ということばを再検討することはより積極的な (Positive-Positivism) 淵開出(意)意志を持っていると思えるからである。まず、実証主義の流れを簡単に見る。

所謂実証主義がコントの『実証哲學講義』(初版一八三〇—一八四二、全六卷)に起源し、それを凝集した『実証精神論』から派生したことは周知の事実である。われわれはこれまで、後者をテキストとして少しばかり眺めてきたが、ここで決して見落としてはならない点は、ここで、コントが、ヴォルテール、サン・シモン等の流れを汲んだ、依然、啓蒙思想家であったこと。第二に、論理の出発点として、俗構造としての完成された科学体系を受け入れたこと。第三に、それに関連して、知識の進歩は、最初の教的思索から始まって諸科学を形成し、先行科学は後行科学より実証性が高い故に、後行科学は先行科学を範とすべきである、と主張していること、等である。

第一の点は、(Ⅱ)で見た通り、神——自然——人間という存在構造の図式から神を追い払って、人間が人類の命運を



担うことを意味する。コントの実証主義にあってはさらに、一切の超越的なもの存在を認めず、人間が直接観察し得る対象のみを対象として研究していき、自然を、人類の幸福増大に役立つように支配していかうとする。(ここで「自然を」を「人間を」に置き換えれば、ウオトソン(一九三三)の行動主義のイデーの一部そのものになる。)その意味で、啓蒙思想は人間中心主義思想であった。

さて、第二、第三の実証主義の性格によつて、その「観察」とは、先行科学たる天文学、物理学等の所謂自然科学のことばによる観察のことであり、遅くなつて個別科学として独立した精神諸科学(心理学、言語学、社会学等)は、心理学の場合最も明らかのように、コントの原則どおり、自己の科学の厳密さを目指してそして先行自然諸科学の成果を探り入れ始めることになつた。そして「世界」は、神とか形而上学的概念とかを要求しない、科学言語を最も還元したところの数学のことばで説明される、整然とした記号体系であり、その「内存在」である人間や、その創造活動の成果たる文学や芸術も、すべてが科学的に説明される、という時代の奮闘意ができた。ところが、それは何を意味したのか。自然科学的認識とは、天文学の場合最も明らかにならうに、必然的に、「事実」

の観察に當つて「時間」「空間」という二つの範疇を要求する認識方法であり、その時・空の網にかかつた要素的事実のみを記述し、観察された対象を科学言語によつて再構成し説明することであつた。果してこの方法で、たとえ人間を観察するとき、その人をまさに「人間」たらしめている、行為の意味や価値の問題に立ち入ることができるのか。否。

したがつて実証主義そのものの内に、理念的なユートピア思想がある反面、まったく逆の、ニヒリズムやペシミズムの「原型」がある、と言ふことができる。そして結果的には後者が次の時代の弊病氣となつたのである。

その時代を引き受け、次の二世紀の「来るべきもの」を、もはや別様には来たり得ないものすなわちニヒリズムの到来を明示的に予言したニーチェ(一九〇一)は、一八世紀は女性性によつて支配され、一九世紀は意志薄弱である、としてコントを次のように批判する。

「オギュスト・コントは一八世紀の継続である(頭に対する心の支配、認識論における感覚論、利他主義的感傷)」。そして、実証主義の決定的なスローガン「進歩」に關しての語勢はさらに激しい。

「進歩。——だまされてはいけぬ、時間は前方へと経過する、——だから

私たちは、時間のうちにあるすべてのものが前方へと経過すると、信じたがと……これは、最も思慮深い者もまだわされる見かけだおしである。しかし一九世紀は一六世紀にくらべて進歩ではなく、一八八八年のドイツ精神は退歩である……「人類」は前進せず、それは現存してすらない。總体的様相は、巨大な実験工房のそれであり、そこでは、或るものは成功するが、それも全時代をつうじて散乱しており、言いようのなく多くのものは失敗し、そこには、秩序、論理、結合、拘束力が、まったくみられない。」(一九〇)

ニーチェのこのアフォリズムの何と斬新なことか。この後半の部分こそ、現代の諸科学(特に心理学)の状況であり、実証主義の当然の帰結である。われわれに關心のあるところから考察すると、ドイツにおける実証主義は、ウェーバー||フェヒナーを介してヴントの所謂心理学主義に結実された。それは一言で説明すると次のようになるであらう。

従来、諸学はその最も厳密なところで、数学や論理学等、アプリアリに真なる事象を扱う學問によつて基礎づけられてきた。ところが数学的思考にせよ論理学的思考にせよ、いずれも經驗的存在者

たる人間の心理的作用の一面面にすぎないのであるから、最も厳密な学たらんとするには、心理学によつてその基礎づけを与えられねばならない。その心理学とは、心理的事実を測定可能な物理的事実に対応させた、実験心理学である。この「心理学主義」が何であるのか、それはここまで論を推めてきたわれわれには明白である。そして、現代心理学の起源をこのヴント(ライプツィヒ大学における心理学実験室の創設年||一八七九年)に認める時、以後の「苦惱」が見事に準備されていることを気付くであらう。今から四年後の一九八〇年、当のライプツィヒ大学で一〇〇周年記念の國際心理学会が開かれる予定であり、この時何等かの形で現状分析が行われることは必ずである、と思われ。

さて、イデオロギーとしての実証主義を批判した次に、「実証的」ということばの持つ複雑な意味構造について考察しなければならぬ。

われわれが日常、あることを「実証」する、と言ふ時、それは、未知の事実Xが、既知の事実(理論)Aと、要素の数において過不足なく一致する、という証明を行うことを意味する。その「要素」とは、属性であり範疇である。そして、「実証」性が高いということは、証明の方法において、要素が科学的に観察され、

言語が論理的に処理されていることを意味し、同時にそれは客観的であり真実に近いこともある。

たとえば、ある日、L氏が仲間のM、N氏と三人で山奥に遊びに行き、そこで得体の知れない程大きな、人間の足型をした穴を発見したとする。M氏は一声「怪獣だ！」と叫んでその場を去り、N氏はその場に立ちすくんで考え込み、L氏は物指しをとり出して細かく測定しはじめた。翌朝、三人三様の談話が新聞に載った。

この際われわれは、L氏の意見が最も「実証」的裏付けを持っている、と言う。この例は必ずしも適切ではないが、われわれの「実証的」のイメージの一つの典型であると思われる。すなわち、「超越」を排し「思弁」を排し、「我」独りが「与件 II Data」を科学的に観察して得た「事実 II Fact」でXがAであることを証明する、これが所謂「実証的」方法である、とする。

コントの三段階において、神学的段階は「超越」であり形而上学的段階は「思弁」であった。それ故にそれらを批判して「実証」の段階を設定したのであった。「実証的」ということばの重層構造はまさにここから来る。そこでわれわれは、これまでの論理の流れを鳥瞰してみよう。そこに自とある認識の地平が開けてくる

であろう。

太初の人間にとって、知覚され得る限りでの居住環境とそれをとり巻く空間は、彼自身をも含めて「混沌」である。そこに空間の異質性を見出し、ある対象に空間の「中心点」を投入すると、空間の異質性はさらに増し、「聖なるもの」の認識ができあがる。やがてそれは共通理解となり、「われわれの世界」が形成され「混沌」の世俗性が次第に「中心点」を基準に浄化されていく。聖構造の形成である。

「中心点」が唯一つに集中された段階が一神教の時代である。ここに至って認識の地平は拡大され、ありとあらゆるもの、天空と地上とが交流を始める。依然空間は、「中心点」に最も近い座にある。教会を最上段に置くヒエラルキーを保った、異質である。ここに「学」が生まれた、「科学」が生まれる。その根本動機は「中心」への讃美であり、その高みへの憧憬である。先に見た一七世紀までの諸科学者によって、素朴な「中心」への信仰は、厳密な推論の共通認識となり「われわれの世界」は、少しレベルの異なるところで再認識された。ニュートンはその最も高いところで「光」を浴びた。(M・エリアード「一九五七」は次のように述べる。

「聖なる空間の体得は八世界創建」を

可能にする。聖なるものが空間の中に顕現するところ、そこに実在が姿を現わし、世界が成立する。しかしながら聖なるものの出現は、形なく漂いながらの空間の中に一つの固定点を八混沌Vの中心に八中心Vを投入するばかりでなく、同時に地平の突起を起こし、それによって宇宙段階の間(地上と天界の間)の交流を樹立し、一つの存在様式から他の存在様式への存在論的移行を可能にする。均質な俗空間のなかのこのような裂目によって創られる八中心Vから、人は超世界的なものとの交流に入ることを得、それによって世界を創建する。なぜなら中心あって始めて、方向づけが可能になるからである。しかしながら産業の台頭は人間の意識構造を基本のなところから変革した。すなわちそれは、超越的な実在としての「中心」の喪失であり、「光を啓く」という啓蒙思想家たちの手によって、「中心点」は人間そのものの内に求められた。俗構造の形成である。そしてこの、人間中心主義の風潮の中で、俗構造としての

一七世紀までの科学の成果を土台に、実証主義の精神が生まれた。

ここでは、諸科学は序列をつけられ、その科学が「正確」で「確実」であるためには先行自然科学——天文学・物理学——の「絶対的」「客観性」に基づか

ばならないという前提が出来上がった。ここですでに所謂「科学」は、中世的な「意味」を失い、「知」を営む者にとって「世界」は、太初の生き生きとした「価値」を剥奪された「わたたくしの世界」と化し、「人類」ということばを大義に、あたかもそれがあの、豊かな経験、思考の象徴であった「われわれの世界」の如くに錯覚を起こすことになった。

「科学」とは元来、最も素朴な意味における「知」の行爲であり、その現象の背後に潜む「意味」を読み取っていくという営為であった。「実証」とは本来、豊かに経験世界の諸現象を、その意味で「科学」することに他ならない。「客観的」とは、主客未分化な、言語以前の段階における「与件」についてしかあり得ない、ことばである。

それらすべてが、今見てきたようなコンテクストの中で、非常に一義的なことであってこれ以外はあり得ないというわれわれの共通認識を形成してきた。それは究めて排他的であり攻撃的であり専門職的である。そこからまさしく「科学的」II「冷たい」という現代のわれわれの素朴なイメージが出来上がったのである。しかもその「冷たい科学」が、大衆というアカデミズムの門を出た途端に、人々にとつての判断の準拠となり、今

日に至ってその弊害が鼓舞されているわけである。

「実証主義」批判の現代的意義は、「科学」の「意味」を恢復させることであると、私は考えている。その点からも、現在の心理学の苦況を超越するには、これまでの「学」の遺産をまったく否定し

て「人間」という概念を第一義的なものとするのは矢張り時期尚早であり（すなわち、これは心理学的存在論を示す。）さしあたって為すべきことはまず、最も科学的であると自負し諸領域の根強い前提となっているワットソニズムを綿密に再評価することが重要であろう。

## IV おわりに

私は現代心理学の方法論的苦悩を、近代科学を無批判に導入してきて重大な反省の時期に来た、今日の知的状況の典型として、その生成過程について眺めてきた。およそ、己の専従する「学」の基盤の脆さを他の領野の人々に公言することは「学問の作法」（『書評』誌四三号 高橋論文参照）として憚るべきかも知れない。しかしそれが、個別科学に限定されない、現代のわれわれの共通した問題である以上、「内」の課題として秘密裡に考察するよりも納得のいく解決への道が開けてくるであろう。その意味からも、

「書評」誌のような議論の場が学内に存在することを高く評価したいし、今後の論議を待ちたい。

さて、われわれの共通した問題意識とは、冒頭に述べた事柄、すなわち、科学の進歩史観と、実証的科学的客観的という図式への懐疑であった。

法則定立的な科学は必然的に科学の進歩史観を受容する。洩れのないデータが集まったその日に真理のヴェールは取り払われるのだ、という確信が研究を可能にする。しかしながら、もしそれが、コント的な意味における「実証的」研究で

あるなら、彼はまったく矛盾した行動をしていることになる。何故なら、実証主義精神にとつて、唯一の絶対的真理などあり得ないからである。何も無いもの、無に向かつての漸近的確証が実証主義的法則定立的科学の本質的な性格である。不幸はその研究途中途の成果が民間に流布し、教育の学問的基盤となることにある。実に恐るべき現象である。

またわれわれは、実証的科学的客観的という図式への素朴な信頼は、その意味の重層構造を辿って行けば、大きな誤謬であることに気付いた。言語獲得以後の「客観性」とは、実は「相互主観」（間主観）の共働による内在化された事件のことなのである。この、多数主観の多元的統一体が「言語」なのである。

この認識の普遍化こそ、啓蒙近代科学主義を超越する第一歩である、と私は信ずる。そこに相互理解の地平が開け、生き生きとした「われわれの世界」が恢復される。

れるであろうし、不毛な「イズム」の対立は止揚され得るであろう。

それは、ある意味では、実証主義によって排斥された「超越的なもの」を積極的に、宗教的レベルとはやや異なったところで認めることでもある。まさしく「超越的」な何かを想定した際の「世界」は聖構造を保ち、心理的には「ハレ」の意識が出来あがるのである。それは、対象に積極の意味を認めていこうとする姿勢でもある。豊かな経験世界の地平はここから開けてくるのである。

実証主義のコンテクストではないところ、「法則」を見出そうとする意志は積極的に認めたい。何故ならそれ自体は、経験的レベルから超越的世界を発見する具体的な手続きの一つであるからである。

最後に、左図の人物にすべてを語らせることによって総括とし、本稿を終えたい。

### 〔註〕

- (1) 高橋和巳「我が心は石にあらざ」（新潮文庫、一九七一年）三一〇ページ
- (2) 木田元「構造主義と人間主義」（『世界』一九七六年二月号）
- (3) コント 一八四四年『実証精神論』醫生和夫訳（中央公論社）『世界の名著』三六巻、一九七〇年）
- (4) ハイデン オラトリオへ天地創造Ⅱ第一

部第二番

- (5) 村上陽一郎『近代科学と世俗革命』(新  
 隆社、一九七六年)
- (6) 村上陽一郎『西欧近代科学』(新隆社、  
 一九七一年)
- (7) 同書、三一〇ページ
- (8) フッサール一九三六年「ヨーロッパの  
 学問の危機と先験的現象学」稲谷恒夫訳  
 (中央公論社「世界の名著」五一巻、一  
 九七〇年)
- (9) 同書、四二三ページ
- (10) 山崎正一編「シンボジウム 自然科学の  
 哲学」(学生社、一九七四年)より、シ  
 ンボジウム第二部での村上の発言、一三  
 二ページ
- (11) 村上陽一郎「キリスト教批判の現代的意  
 義——その自然観と時間軸の構造」(情  
 況)一九七三年八月号)
- (12) 前掲『近代科学と世俗革命』八七ページ
- (13) 同書、一〇四ページ
- (14) 同書、一〇三ページ
- (15) 同書、二六一ページ
- (16) 同書、二六一ページ
- (17) ニュートン 一六八六年「自然哲学の数  
 学的諸原理」河辺六男訳(中央公論社、  
 「世界の名著」二六巻、一九七一年)
- (18) 同書、五六四ページ
- (19) コント 一八三三年「社会再組織に必要  
 な科学的作業のプラン」鷲生和夫訳(中  
 央公論社「世界の名著」三六巻、一九七  
 〇年)六四一—五ページ
- (20) 前掲『実証精神論』二六〇ページ
- (21) 同書、一五六ページ
- (22) 『近代科学と世俗革命』
- (23) 『実証精神論』一六一ページ
- (24) 同書、一六四ページ
- (25) 同書、一六三ページ
- (26) フロイト 一九七三年「人間科学の諸  
 理論」竹内良知訳(白水社「人間の科学  
 叢書」一九七四年)一一一—二二二  
 中央公論社「世界の名著」三六巻、一九七  
 〇年)五一—四二二
- (27) 清水幾太郎「コントとスペンサー」(中  
 央公論社「世界の名著」三六巻、一九七  
 〇年)五一—四二二
- (28) 同書、一八八ページ
- (29) 『実証精神論』一四七—一八八ページ
- (30) 今村仁司「フエヒススム論からイデオ  
 ロギー論へ」(『現代思想』一九七五年  
 三月号—四月号)
- (31) 『実証精神論』一五〇ページ
- (32) 同書、一五四—一五七ページ
- (33) 同書、一五四—一五七ページ
- (34) 同書、二二六—二二九ページ
- (35) 同書、二二六—二二九ページ
- (36) 同書、二二六—二二九ページ
- (37) 同書、二二七—二三〇ページ
- (38) 同書、二二七—二三〇ページ
- (39) フェヒナー 一八六〇年「精神物理学綱  
 要」の出版年
- (40) ライツァイヒ大学における心理学実験室  
 の創設年
- (41) 『実証精神論』一九三—二四二ページ
- (42) スペンサー 一八五四年「科学の起源」  
 清水禮子訳(中央公論社「世界の名著」  
 三六巻、一九七〇年)
- (43) ケーウィン 一八五九年「種の起源」
- (44) 前掲『科学の起源』三九九—四〇二  
 ページ
- (45) ボルトマン 一九四四年「人間は(七)ま  
 て動物か」高木正孝訳(岩波新書、一九  
 六一年)
- (46) Watson, J. B. 1913. "Psychology  
 as the Behaviorist views it"  
 (Psychological Review, 20,  
 188—177). 1917. "An atten-  
 pted formulation of the sc-  
 ope of Behavior Psychology"  
 (Psychological Review, 24,  
 329—352)
- (47) ニーチェ 一九〇一年「権力への意志」  
 原佑訳(理想社「ニーチェ全集」一一、  
 二巻、一九六二年)
- (48) 同書(二巻)九三—一〇二ページ
- (49) 同書、八七一—八七三ページ
- (50) エリアーデ 一九五七年「聖と俗」風間  
 敏夫訳(法政大学出版局「叢書ウニベル  
 シタス」一九六九年)五六—六二ページ



たなか としや  
 (関西大学・大学院)

南開大学・経済研究所編著

『壟断・財閥・大企業』

# 独占・財閥・大企業 第二回

訳／結城 良

## 第四章 独占利潤

独占利潤とは、生産と市場を独占した資本家が、平均利潤をはるかに超過した利潤を取得することである。できるだけ多くの独占利潤を追求することは、資本主義的独占組織の主要な目的であり、それは独占資本主義の発展の原動力でもある。

自由競争の時代には、資本家は最大限の利潤を獲得しようとして、利潤率は部門間の競争によって均等化される傾向にあるため、各部門の資本家は平均利潤しか獲得することができず、各種の商品は生産原価に平均利潤をプラスしただけの生産価格で販売される。したがって、この自由競争の時代には、個別企業は新技術を優先的に採用することによって個別の生産価格を社会的生産価格より低くすれば平均利潤を上回る超

過利潤を得ることはできた。しかし、新技術の採用が一般化することによってその超過利潤は消滅してしまふため、それを長期間維持することはできなかったのである。

独占段階に達すると状況は異なってくる。独占段階には、独占資本家は最大限の利潤を追求するだけでなく、恒常的に高額の独占利潤を実現し維持する条件と可能性を持つのである。生産と資本の高度の集中の基礎の上で、少数の巨大企業が一つの産業部門で大部分の生産と販売を支配するようになると、産業部門間の資本の自由な移動は困難になる。このため独占資本家は、商品市場を操作し、生産価格よりもさらには商品価格よりも高い独占価格で商品を販売し、また様々な手段によって、平均利潤をはるかに上回る高額の独占利潤を獲得することが可能になるのである。

労働者の創造する剰余価値は独占利潤の主要な源泉

である。しかし同時に、独占利潤の源泉のうちには労働者の労働力の価値と小生産者の創造する価値の一部も含まれている。具体的には、独占利潤の源泉は大体的なものである。

第一に、独占資本家は生産の過程で不断に賃労働に對する搾取を強化し、労働者の創造した剰余価値をさらに多く絞り取る。そのうえ、独占価格で商品を販売することによって、労働者の取得した労働力の価値の一部を収奪する。こうして大量の剰余価値と労働力の価値の一部が独占資本家の占有するところとなり、高額の独占利潤に転化する。

第二に、独占資本家は彼らの商品を高価格で販売し、原材料を低価格で購入することによって、小生産者に對して残酷な収奪を行う。とりわけ、工業製品と農産物との「鉄状価格差」を不断に拡大し、広範な小農民を搾取する。こうして、独占資本家は掴み取った小生産者の剰余労働および必要労働の一部を彼らの独占利潤へと転化させる。

第三に、独占資本家はその独占的地位を根拠に、非独占企業の生産する部品、付属品や原料を買叩き、これらの非独占企業の資本家が搾取した剰余価値の一部を独占資本家の手中におさめ、高額の独占利潤を形成する。

第四に、独占資本家は不平等交換を通じて、植民地・半植民地や後進国の人民を残忍に収奪し、商品価値をはるかに超えた独占価格で彼らの商品を輸出し、これらの国家で生産される農産物や鉱業原料の商品価値よりはるかに低い価格で買い漁り、これらの国家の人民の血と汗を彼らの独占高額利潤に転化する。

第五に、独占資本家は国家機構の支配を利用して大

量の軍事特需を創り出し、絶えず兵器の独占価格を騰貴させ、また国家資金で軍事産業に生産設備や実験研究費や、また各種の補助を行わせる。こうして国家を通じて絶えず苛酷な雑税を強化し、広範な人民から大量の資金を絞り取り、独占資本家の独占高額利潤に転化するのである。

第二次世界大戦中と大戦後、各国の独占資本の支配が強大化するにつれて、独占組織の獲得する独占高額利潤は急激に増加した。アメリカを例にとると、アメリカの企業は一九四〇年から一九四九年の間に年平均二四三・六億ドルの利潤を獲得していたが、一九五〇年から一九五九年の間では四二一・二億ドルに増加し、一九六〇年から一九六九年には六七四・七億ドルに激増した。一九七〇年にはアメリカの大企業だけで、海外から稼ぐ利潤は八〇・二億ドルにも達している。そのうち欧州地域での利潤は二三・二億ドル、アジア、アフリカ、ラテン・アメリカの海外投資における利潤率は一般に七割以上であり、ヨーロッパ「EC」六カ国内での利潤率は一〇・六割、アジアでは三〇・二割、そして中東地域では七一・五割にも達する。

## 第五章 独占価格

独占価格は、商品の原価に独占高額利潤をアラスしたもので、独占資本家が独占高額利潤を獲得するための重要な手段である。

自由資本主義の条件の下では、生産価格は商品価値の転化形態であって、商品の原価に平均利潤を付け加えたものである。価値法則は生産価値の形態を通じてその作用を及ぼし、商品の需給関係の影響下で市場価

格をつねに社会的生産価格をめぐって波動的に変動させる。独占資本主義段階に達してカルテル、トラスト、コンツェルンなどの大独占組織によって大部分の生産物と産業部門が支配されると、競争と資本の自由な流動が阻害されて、独占資本家は平均利潤を大きく上回る独占高額利潤を獲得する可能性をもつようになる。そのため、この時には独占資本組織の生産する商品は生産価格では販売されず、生産価格または商品価値よりも高い独占価格で販売される。

独占価格は生産価格や商品価値よりも高い。しかし全体から見れば、独占価格の形成は全社会的商品価値と剰余価値の総和を変化させはしない。それが変化させるのは、企業間における剰余価値の分配のみである。独占価格は依然として商品価値を基礎としており、それは価値法則の作用を変更するものではない。全社会的に見れば、商品（独占的、非独占的とを問わず）の価格の総和は、総じて商品価値の総和に等しい。独占価格は、独占資本家が労働人民の創造した価値総額の中からより多くの部分を絞り取るに過ぎない。

資本主義国家では、独占組織は様々な方法を使って商品の高価格を維持する。政府に高関税政策を行わせ、資本主義的独占組織を外国との競争による打撃から保護させる。政府から輸出助成金を引き出し、国内外市場を争奪し、国外市場へ独占高価格で商品を輸出する。

国家独占資本主義を充分に利用して、国家から安価な原料供給を受け、独占高価格で各種の軍事物資を国家に供給するなどのやり方こそ、独占価格を形成する重要な手段である。独占資本家は一方では商品を生産する労働者に対する剰余価値の搾取を強化し、農民に対しては農産物を低価格で販売させ、他方で彼らに独占

企業の商品を高価格で売りつけるのである。

独占資本主義の条件下では、独占価格が支配的な地位を占めている。一般的に言えば、独占資本がかなり優勢な部門では、まだいっくらの非独占的な中小企業が存在したとしても、それらの生産価格はやはり独占価格の影響を受けざるを得ない。独占価格は価値法則の自律的作用を変更することはないが、それに對する大きな破壊性をもっている。独占資本主義経済の生産の無政府状態はますます重大なものとなる。独占価格が広範に行われる結果、資本主義国の物化の全般的な騰貴を引き起こし、労働者と職員の実質賃金は絶えず間なく低下し、農民の実質収入は減少し、過剰化した商品の販売は困難になり、新たな、より深刻な資本主義的恐慌の条件が準備されるのである。

## 第六章 アウトサイダー

アウトサイダーとは、独占組織に加入していない企業のことである。帝国主義段階において独占組織が支配的地位を占めるようになったとしても、「絶対的独占」や「純粋帝国主義」の存在はありえない。独占組織の外にはまだ大量のアウトサイダーが存在している。アウトサイダーにはだいたい二つの種類がある。第一

の種類の種類は強大な企業であり、経済力から言えば独占組織にはやや劣るが独占組織の個々の企業よりは強大である。第二の種類は大量の中小企業である。第一の種類のアウトサイダーの存在理由は、主要にはこれらの強大な企業が独占協定の外にいた方がより有利だからである。たとえば、カルテルが価格を上げた場合、アウトサイダーはカルテル価格より少し低い価格で自

己の商品の販路を拡大することができる。またカルテルが市場を独占するために生産を制限したときには、アウトサイダーは、この時とばかりに販路を拡大することができるのである。第二の種類のアウトサイダーの存在理由は、中小企業が独占組織に参加することは「独立」している時より、さらに悪い境遇になると感じているからである。

アウトサイダー、特に第一の種類のアウトサイダーは、独占組織に対して大きな影響を与える。アウトサイダーは独占組織が価格を上げ、商品の供給を制限することを妨害することができる。アウトサイダーはまた、カルテルより少し低い価格で商品を販売することによって、独占組織の恣意的な高価格政策を困難に陥れることができる。

独占組織とアウトサイダーの間には激烈な闘争が行われる。独占組織は常にアウトサイダーに強力な打撃を与え、彼らを自己の独占支配に屈服させるか、あるいは自己の支配下におくか、再起不能にして統合しようとする。独占組織がアウトサイダーを攻撃し、圧殺する手段は多種多様であるが、主要には次のようなものがある。独占企業が手を回してアウトサイダーの原料、労働力、信用貸付の供給源や運輸手段を奪い取る。アウトサイダーの販路を強奪する。ダンピングでアウトサイダーを破産させ、その後再び独占価格を高騰させる。各種の発明、創造や技術革新の特許を独占する。さらには爆弾を使ったり、ゴロツキを雇ってアウトサイダーを破壊したり等々。

## 第七章 持株会社

持株会社は、株式支配会社、株式権利会社とも言い、トラストやコンツェルンの中核組織であり、他の企業を経済的に支配していく一種の特殊な組織形態である。持株会社は資本主義社会の中で、他の会社の株式を支配することを専門の業務とする会社である。それは一般には具体的な商品の生産あるいは販売の業務を営むことはなく、その業務は他の会社の一定量の株式を保有することによって他の会社を支配し、操作することを目的としている。持株会社は、その所有する他会社の株式の他には、資産を持たない。

産業資本の持株会社は株式を支配する業務の他にも、ある種の商品の生産販売を業務とするし、多くの金融資本グループの銀行もまた株式支配を主要な業務にしている。帝国主義の時代には、持株会社は金融寡頭制が他の資本に対して支配権を拡大するための道具である。持株会社は自己の発行する株式や社債によって貨幣資本を吸収し、吸収した貨幣資本で他の会社を買収する。

株式会社の株は比較的分散しているため、少量の株式の株主は会社株主の議決に決定的な役割を持たないばかりか、小株主はもともと株主総会に出席しないので、普通、持株会社は株式会社の株式総額の三〇〜四〇%の株式を掌握するだけであり、時には五〇〜一〇〇%の株式だけで決定的な株数となることができ、株式会社を支配することができる。持株会社はこのようにして少量の資本で他の一連の会社にいわゆる「ピラミッド型」の支配を拡大するのである。つまり、持株会社はまず主要な株式会社（親会社）の株式を取得する。つぎに、その株式会社の資本で、他の株式会社（子会社）の株式を買収して株式支配額を握る。さらにまた「子会社」の資本を利用してまた別の株式会社の株を買収して

「孫会社」にする。こうして独占資本グループは「親会社」の支配権を握るだけで、「親会社」を通じて多くの「子会社」を支配し、これらの「子会社」を通じて、さらに多くの「孫会社」を支配することが可能になる。こうしていけばさらに多くの層の会社が支配可能になることもできる。このようにして、大金融寡頭制は持株会社を通じて自己の資本の何倍もの企業活動を掌握することができ、国民経済全体に対して支配と操作力を拡大することができる。

持株会社は二〇世紀の初めにアメリカに出現し、後にはアメリカその他の資本主義国で広範に出現するようになった。たとえば、アメリカのアメリカ銀行グループのトランスアメリカ・コーポレーションは、もとはそのグループの支配に所属する銀行の持株会社であったが、現在はグループの支配するアメリカ西部各州の非銀行金融機構の持株会社である。一九六三年には一六〇のかなり大きい非銀行金融企業を支配し、資本金は三・六三億ドルであるが、その支配する各会社の資産額は二〇億ドル前後に達し、自己の資産額の六倍にもなっている。ニュージャーシー・スタンダード・オイル（現在のエクソン）も持株会社であり、一九二八年以来、持株会社としての活動を始め、一〇〇余の国家に分布する二五〇以上の子会社を支配している。またAT&T（アメリカ電話電信会社）も、一方で電話電信関係の業務を自ら経営しながら、現在二〇〇〇余の子会社を支配し、その触手はアメリカ及び資本主義世界各地に遍く伸びている。

（ゆきりょう）

文学部中国文学科

# 日中文化関係史の一面

近世の中国と日本

(XXVII)

増田 渉

## 『明神宗実録』の記載

『征韓録』や『西藩野史』に、鳥原喜右衛門が茅國科を中国に送還し、福建省を経て北京まで行き、時の神宗帝から歓待を受けたように書かれているのは、事実としては疑わしく(中国側の記録には見えないので)、『兩朝平攘録』という如く、福建省の梅花所まで行ったことが事実で、それが誇大に伝えられたものであろうと前号に書いた。そして『明実録』に当たったが、北京まで行き、神宗に謁見したような形跡は見られないといった。

というのが、私はこれまで『征韓録』や『西藩野史』にいうような話を聞いたことがなかったし、中国の史料で確かめようとして、『明史』をはじめ、谷應泰の『明史紀事本末』、王鴻緒の『明史稿』、夏燮の『明通鑑』、陳鶴・陳克家の『明紀』などに当たって見たが、そのような記載を見出すことができなかったし、最後に念のため『明神宗実録』(台湾「中央研究院歴史語言研究所」版)に当たったのだが、やはりそのような記載を見出すことはできなかった。

ただ改めて一言、補っておきたいのは、『明神宗実録』巻三四八の、萬歴三十八年六月のところに、『兵部』からの上奏として、浙江巡撫・劉元燾の報告が次のように伝えられていることだ。それは、

「異船一隻を見張りが獲えた。その中に官役の華人、夷人若干名がいて、調査したところ千総(武官名)の毛國科(毛は茅と同音)は遊撃(武官名)の茅國器から倭宮(日本軍官)に差遣されてスパイをしていたが、いま執政・家康が倭人に(命じて)船で送り帰して来た。また先年捕虜になっていた者ならびに賊首(倭寇に加担したものの首領)季(季)州等一人を縛り送って来たので、科(國科)に連れ帰らせて処刑(季州等一人を?)した」といい、つづけてまた、

「福建巡撫にも審査させ、最終的にはその捕虜になっていた民・兵は、それぞれ原籍の親隣や里甲(隣組長)に保証させて引き取らるべきだということとで、その通りに決定された」となっている。

この「兵部」からの上奏は、当時の公文用語で書かれていて、かなり判読しにくいところもあるが、だいたい以上のような主旨に読みとれる。倭宮に差遣されスパイをした(原文「差往倭宮用間」)というのは、『兩朝平攘録』や『武備志』によると、茅國科等は和議をすすめる機文を日本陳宮に持ってきていたが、急にそのとき明軍は日本軍を攻撃したので、そのまま茅國科等は、日本軍とともに退去し、日本に連れて来られたといっている。



る。

さて、右の『明神宗実録』の記事によっても、茅園科を送還して来た倭人についての取扱いは何も書かれていず、ただ浙江巡撫からの報告を「兵部」が上奏し、また「兵部」が福建巡撫への指示について上奏しているだけである。これに拠って考えても、『兩朝平攘録』や『武備志』の記載、つまり福建省の梅花所まで連れて行ったことをまず事実と見なければならぬであろう。

### 石曼子（島津）

今一「前号の補足として挙げておきたいのは、朝鮮役を書いた中国の史書では『明実録』をはじめ、『明史』『明史紀事本末』『明史稿』『明通鑑』『明紀』など（また『兩朝平攘録』にも見えるが）薩摩の「島津」を、発音のまま「石曼子」と書いていることだ。

日本軍が三路（三方面）に分かれていたとして、東路には蔚山に拠った「清正」、西路には粟林に拠った「行長」と、それぞれ清正は、行長の名をあげているのに加藤、小西の姓はいわず、中路は泗川に拠った「石曼子」と書かれている。これは前の「清正」「行長」と釣り合わない書き方だ。

例えば『明史』（卷三三〇）の「外国

伝一」（朝鮮）には、

「時に倭また三窟に分かる。東路は則ち清正、蔚山に拠る。西路は則ち行長、粟林・曳橋に拠り、砦を建てること数重。中路は則ち石曼子、泗川に拠る」と書かれている。『兩朝平攘録』には「石曼子」あるいは「石曼子義弘」と書いている。

このことは、島津氏が当時の中国（明）では、朝鮮役より以前から、一般に「シマズ」として知られていて、清正や行長などは朝鮮役で、はじめてその名を知られるようになったということではあるまいか。いずれにしても、『清正』『行長』と並べて「石曼子」が出てくるのは、読んでいて何とも奇異な感じがする。

私の見たものうち茅元儀の『武備志』（卷三三九「四夷」一七「朝鮮考」）にだけは「清正」「行長」「義弘」とそれぞれ同じパターンで書かれている。『兩朝平攘録』には「石曼子」としたり「島津」としたところもあるが、これは史料を寄せ集めて編集したからであろう。特にひどいと思うのは『明神宗実録』（卷三三九、萬曆二十六年二月の条）に、

「各倭將、力を悉して西に行長を援く。総兵・陳璘は即身、將士に先んじて衆を鼓して大に戦い、大倭將・石曼子

を銃死し、また一部の將を生擒す云々」（原漢文）

と書いている。ここにいる「大倭將・石曼子」は、「石曼子」が「清正」「行長」と並んで、それぞれ東路、西路、中路の総帥として書かれているところから見て、島津義弘を指すものといえるが、この部分は出先の総指揮者、邢玠の報告を録したものである。『明実録』も各部

や出先部隊からの報告を、そのまま録載して、史料としての顛倒を経た記載といえないから（例えば、ある時は「毛園器」とし、ある時は「茅園器」としたりしている）、「実録」というのも、この『実録』の記載は、いわば素材の集積だから、これをそのまま無批判にすべて事実として採ることは危険だといわねばならない。

伝えられる『明実録』がみな危大な写本によるもので、内容のすべてにわたって綿密な整理を加えて統一した刊本がなかったことによるといえるが、また転写の間にいろいろ誤脱が生じたことにもよる。いま本文五九六巻にわたって諸写本をあつめて校勘した『明神宗実録校勘記』（六冊）が台湾「中央研究院歴史語言研究所」（一九六七年）から出版されているが、各伝写本には異なる文字がかなり多い。

### 鄭成功と「国性爺」

明末に福建に拠って、明朝末裔の隆武

帝を擁立し、強大な清軍の侵入に反抗し、わが国にも援兵を求めてきた鄭芝龍のことも、ぜひその部将であった周崔芝が撤斯瑪王に援兵を乞うたという「日本乞師紀」等の記載の検討、その周崔芝と薩摩との関係、ひいては朝鮮役まで逆上って明と薩摩との関係を穿鑿して、かなりの紙数を費やした。これから元に帰って、鄭成功のこと（以前にも少しふれたが）について少し書いておきたい。

鄭成功は鄭芝龍が平戸にいた時、日本女性との間に生まれた混血児、つまり日本の血が半分混っているということ、また鄭成功が明朝の末裔を擁立して、父の芝龍が清軍に投降した後も、あくまで明朝を守り、台湾に拠って屈せず、わが国の武士道倫理の基盤「忠義」を買いたということ、で、徳川末期のわが国の学者文人から特に尊称された。一方また近松門左衛門の「国性爺合戦」の演劇が異常な人気を呼んで、庶民の間にも広く鄭成功の和藤内がもてはやされた。

文政年間、水戸藩主の命で、同藩の国史總裁川口長壽の編纂した『臺灣鄭氏紀事』三巻は、周到な用意で、多くの史料を引用して鄭氏一家の用意で、多くの史料に研究して、編年一家の漢文で書かれたものだ。また平戸藩主の命で、その儒臣・朝川鼎（善庵）は漢文「鄭將軍成功伝」（嘉永三年刊）を書いた。これはもと碑

文として書かれたが、「伝」の末尾に「命」撰作之伝、勅石于千里浜、以存古蹟」と見える)、実際に碑に刻するには長文にすぎ、後さらに儒臣・葉山高山(鑑軒)に撰文させ(嘉永五年)、碑に刻して千里浜(鄭成功が生まれた河内浦に近い)に建てた。その碑文は平戸の人、菅沼貞風の『大日本商業史』(明治五年)及びそれに附載する『平戸貿易史』に収録されている。斎藤正謙(拙堂)は海外で活動した三人、山田長政と浜田弥兵衛と鄭成功とを取りあげて『海外異伝』(嘉永三年)を書いた。この中で斎藤は、「鄭大木(成功)は慷慨義を唱え、顔日を廣淵(日の入る所)より招き、孤兵を以て勃興の敵に当り、百折撓まず、わが楠中將(正成)の風あり。その子孫に及びては、正統を一隅に奉ずること数十年、また楠氏と相類す。蓋しわが東方の精を孕む故か」(原漢文)と論じている。当時の士人が鄭成功を称讃する理由がどこにあったかが知られる。

近松の『国性爺合戦』は、「他に類例を見ない珍しい記録を演劇史上に止めて居る。それはこの初興行が、正徳五年一月、初日を開場してから、享保二年二月の千秋楽まで、三年に亘って一七ヶ月(享保元年正月閏あり)の長い間を、毎日大入りを取ったといふことである。こんな例は外に滅多にない」と水谷達晴氏はいっている(大正十一年「大近松全集」第三卷『国性爺合戦』解説)。「国性爺」というのは、鄭成功が明の陸武帝から、明朝の姓「朱」をもったため「国姓」と称せられた(朱成功ともいう)ことに拠るもので、近松の場合、「国性」としているが、史実に基づけば「国姓」とすべきである。「爺」というのは中国で尊敬の意味をあらわし、呼び名の下に附けられたものである。「国性爺」狂言は、その後(初興行の終わった三年後)享保五年正月に第二回の上演があり、同一六年五月に第三回、寛延三年七月に第四回の興行を重ねたというが、それ以後も反覆して興行され、いつも大当りであったと水谷氏はいっている。そのため各方面に広汎な影響をおたえ、「浄瑠璃や歌舞伎は無論、読本、草紙、小説、謡曲、絵画から玩具、人形、菓子、衣裳の模様にも多用された」という。鄭成功の「国性爺」がわが国の庶民の間にもった圧倒的な人気知られる。

『国性爺合戦』の異常な人気によって、近松は享保二年に『国性爺後日合戦』を、同七年には『唐船嶺今国性爺』を書いた。また紀海音は『傾城国性爺』を作り、錦文流も『国仙野手柄日記』という文弥節の正本を出したと水谷氏はいっている。これらは演劇本だが、読本草紙にも多

くの「国性爺」類作が出て、就中、其頃の『国性爺明朝太平記』や『国性爺御前軍談』、八文字屋自笑の『風流傾城性爺群談』など、さらに石田玉山の『国性爺忠義伝』、墨亭雪丸の『国性爺合戦』などを挙げる事ができると水谷氏はいう。また水谷氏は「南水漫遊拾遺」を引用して、『国性爺合戦』の中の「樓門」の一段は、長崎の通訳、周文二右衛門という人によって中国文に訳されたといひ、発端の二節「説話老」官既已再来唐山、要攻打滿州王、興復明作、招葬義成士、一夜陪從老娘、同和藤内到五常軍甘輝住領的獅子城下云々」を引用している。「東洋文庫」所蔵『国性爺合戦』の竹本筑後掾の七行九〇丁大本の正本(デキスト)が、昭和四七年「日本古典文学刊行会」によって復印され、それに堤精二氏の解題冊子が附けられている。これによると、水谷氏のあげたもののほか、小説に関楽子の『今和藤内唐土船』、草雙紙類に黒本の『こく性や合戦』が鳥居清満の画で出され、黄表紙では『石千屋繁昌』(天明二年)が伊庭可笑によって作



「武経開宗」翻刻本

臺灣鄭氏紀事卷之上

水藩國史總裁 臣 川口長孺 編纂

臺灣為海中孤嶋、臺灣古無聞焉、明人始來往其地、明史紀事本末卷七十六 似粵弓中為臺灣、明史紀事本末卷七十六 其地在東陽形、明史紀事本末卷七十六 雞籠山淡水洋、明史紀事本末卷七十六 日本水道順風七十更可達、明史紀事本末卷七十六 更故以、明史紀事本末卷七十六 計道里云、明史紀事本末卷七十六 港口五更可達、明史紀事本末卷七十六 自臺灣港至澎湖嶼、明史紀事本末卷七十六 四更可達、明史紀事本末卷七十六 自澎湖嶼

「臺灣鄭氏紀事」和刻本

られ、合卷本には東西庵南北の「国姓帝  
後談」(文化二年)以下、趣向立にて  
「国姓帝」を使つたものが多いといつて  
いる。

『臺灣鄭氏紀事』

鄭芝龍については、清初の谷應泰の「  
明史紀事本末」(順治一五年序)巻七六  
「鄭芝龍受撫」に、その投降までのこと  
がかなり詳しい。また花村看行侍者の「  
談往」にも「飛黄始末」と題して、やや  
詳しく記されているが、「談往」も明末  
清初のものだ。それは鄭芝龍を記した最

後に、「久しからずして本朝に帰投して  
盛京に赴く」とあるからだ。『談往』は  
明の遺民が往事を、大たい崇禎時代の軼  
聞二七条を談つたもので、「四庫全書提  
要」の「史部」「存目」にも取りあげて  
解題して、いまは類書「説鈴」の中  
に収められている。『談往』では芝龍は  
「飛黄」と号したといひ、「鄭成功伝」  
(後述する)でも「字は飛黄」としている  
が、「武経開宗」では「飛虹」とし、「華  
夷変態」にも「飛虹」とする。「臺灣外  
記」や「小腆紀伝」は「飛皇」としている。  
『武経開宗』は明末の書で「甫田、黄  
献臣輯著」といひ、崇禎九年四月の序が

あるが、寛文元年にわが国で訓点し翻刻  
(七冊)されている。鄭芝龍がまだ清軍  
に帰投しない前、南海で武威を振つてい  
たころの出版と考えられる。この書は戦  
法、戦術を解説し、また武器、陣法を  
示した「武経」であるが、その中に「古  
今名将」の巻があつて、周、春秋、戦国  
以来、明朝末までの有名な武将をあげた  
略伝があり、この明朝の最末に鄭芝龍を  
あげている。ここでは鄭芝龍は号を「飛  
虹」として、今上(崇禎)の時、三  
省総戎大將軍に累拜し、大都督の事を  
行ひ、南海給兵に任ぜらる」といひ、ま  
た「十年兵を養つて、公家の一粒を費や  
さず」といっている。彼の最も南海に威  
力を張つたころである。ただし後に鄭芝  
龍は福建に侵攻してきた清軍に投降した  
ので、「小腆紀伝」(巻六三)では「貳  
臣伝」「清史列伝」(巻八〇)では「逆  
臣伝」に列せられた。

鄭成功とその一生に関して研究し、上  
中下三巻に編集したものに、水戸藩の川  
口長孺の「臺灣鄭氏紀事」(文政二年)  
があることは先にふれた。この書は明清  
の關係諸史料およびわが国にのこる關係  
諸史料を広く搜索し考訂して編集した漢  
文の編年体で、慶長一七年(萬曆四〇年)  
鄭芝龍および祖官なるものが幕府(駿府)  
に來謁したことに始まり、元禄三年(一  
六九六年)清主は特に詔りして、成功  
とその子の経(台湾で死去)を、故郷の  
福建省南安に帰葬せしめたところ  
で終わっている。  
長孺はこの書の最後に、「事は諸書に  
根拠し、必ずその確実を期す。而して行  
文の如きは則ち錯綜を全粹し、務めて刪  
潤を加え、その次序あらしむ。専ら鄭氏  
に係わるるに雖も、傍ら明末の事に及ぶ。  
凡そ八十有餘年間、治乱盛衰興廢の故、  
天命人心去就の際、蓋し略々観看すべき  
ものあらんといふ」(原漢文)と述べて  
いる。この書の編纂の主意をうかがうこ  
とができる。

前記した謝国楨の「晚明史籍考」(巻  
一三)にもこの書を取りあげ、解題を加  
えているが、江戸時代に日本で編集され  
た鄭氏研究の特筆すべき文献といふこと  
ができる。

さて『臺灣鄭氏紀事』の冒頭には、台  
湾という土地を諸書を引いて説明し、次  
に編年の最初に、わが国の史料「武徳大  
成記」「国史」「武徳編年集成」等を引  
用して「慶長一七年、明の鄭芝龍および  
祖官は、駿府にて幕府に來謁す、幕府親  
しく問うに外国の事を以つてし、芝龍は  
薬品を献ず」(原漢文)といっている。  
このようなことは中国側の諸史料には見  
えないところだ。そして「鄭成功伝」を  
引いて、「芝龍、字は飛黄」とし、「武  
経開宗」および「華夷変態」を引いて

「後に飛虹得軍と巨す」といっている。父は紹祖といひ、泉州(福建)の太守、蔡善繼(『鄭成功伝』には葉善繼とする)の庫吏で、芝龍はその長男であったが、「生まれて姿容秀麗、稍々長じて膽智材略は等倫に過絶し、時人あるいは賊艦光を以てこれに擬す。頗る文才あり、吹彈歌舞解せざる所なし」(原漢文)などと『鄭成功伝』、『談往』を引いて述べ、嘗て父紹祖の愛を失ひ、紹祖は怒つて彼を逐ひ、芝龍は海船に逃げた。船は出航の刻限になつて帆を揚げたので、そのまま巨商に懇願して、いっしょに海外へ出て、ついに日本に來た。時に年一八で、肥前の平戸におり、平戸老一官と稱したが、後に商船に乗つて屢々日本に往來したと、『談往』、『鄭成功伝』、『南塾集』、『華夷變態』、『琉球志略』、『長崎夜話草』などを引用する。

慶長七年(天啓元年)の條に、「是より先、南海に盜起り」、その首魁は顏振泉(『鄭成功伝』には顏思齊とする)であった。振泉は「日本甲螺」(甲螺は「頭目」の意味とされる。「カシラ」の音が「甲螺」と転訛したものと考えられる)と稱し、わが辺民を率いて台湾の地を占拠し、群盜と十寨を分けて、これを保有した。芝龍は弟の芝虎とともに振泉の党に入り、芝龍の貨物四艘を劫奪し、芝龍の富みは十寨の第一であった。やがて振泉が死亡し、群盜から推されて芝龍が首魁になり、海上を縱横したと『談往』、『鄭成功伝』、『明史紀事本末』等を引用して述べる。そして掠奪して末まず富裕になり、明兵もよく抗ぐことができず、招撫の議が起り、芝龍は前に蔡善繼に恩を受けていたので、蔡善繼から投降をすすめ、芝龍はついにそれを約束したと『明史紀事本末』、『鄭成功伝』を引用していつている。

慶長七年(崇禎三年)の條に、「初め芝龍の平戸に居るや、平戸の士人、田川氏の女を娶り、成功および弟七左衛門を生む」と『鄭成功伝』および『田川七左衛門訴状』を引用する。以下もなおついで『臺灣鄭氏紀事』は鄭芝龍の行動を述べるが、成功が生まれたといふことでは、『鄭氏紀事』の記載から離れ、「鄭氏紀事」がしばしば引用する『鄭成功伝』について記しておきたい。この書は中国でも日本でも、鄭成功を伝える有力な史料の一つだからである。

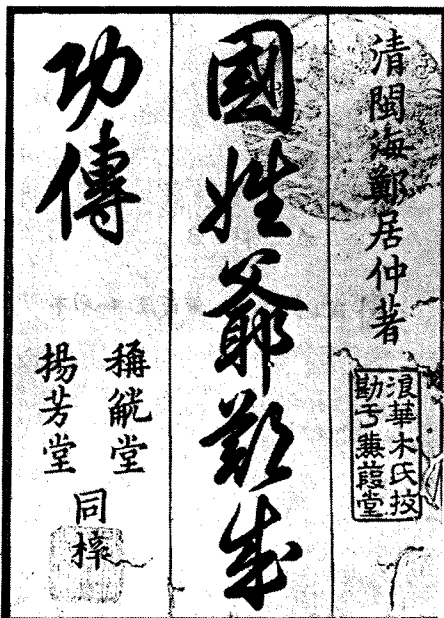
### 『鄭成功伝』

藤原家孝の『落粟物語』という隨筆雜記があり、もと写本(文政六年、麻生知俊)で伝わつたが、後に「国書刊行会」の『百家隨筆』第一(大正六年)の中に収載された。いつの頃に書かれたかハッ

キリしないが、内容を見ると、寛永年間徳川家光の上洛のことがあり、寛永九年の春、仁和寺で読経あり云々、とある。およそその期間の見聞を集め記したものであるから、恐らく安永末年か天明、寛政初めころのものかと思われる。だいたい公卿仲間のことを述べるものだが、この中に、鄭成功について、比較的史実に沿つて書かれた一段がある。何を根拠にして書いたものか疑問であつたが、この内容叙述を検討してみても、『鄭成功伝』を大たいそのまま和文化にしたようなものであることを知つた。

この『落粟物語』に見るように、当時の鄭成功に関するわが国人の知識は、断片的な風説が長崎から伝えられたほかは、ややまとまつたその人となりや、時代、状況の波動を、一般に伝えたものは主として『鄭成功伝』ではなかつたかと思う。『鄭成功伝』は安永三年(一七七四年)二月、わが国(大阪)で訓点翻刻されていて、『落粟物語』の筆者も、恐らくこの翻刻本を見たものと考えられる。

鄭成功の事跡を記したものとては、黄宗羲の「賜姓始末」一卷が知られている。また江戸昇(東旭)の『臺灣外記』(康熙四三年序)三〇巻は「章回小説」体であるが、鄭芝龍の出生から鄭克塽の



『鄭成功伝』 蕪葦堂和刻本

帰順まで六二年間に亘る鄭氏の興衰を描き「閩人（福建人）が閩事を語って始末に詳しく、国史の採択に備ふるに足る」（原漢文、陳衍永の序）とされる。

しかしわが国では主として翻刻された『鄭成功伝』で人々に知られたといえる。『鄭成功伝』二冊を訓点して紹介したのは、大阪の木村孔恭（兼葭堂）で、彼が入手した原本に拠って校刊したものだ。いまもこの翻刻本は、稀れた古書店の目録で見ることがあり、私も一本を所蔵する。この翻刻本が出て以後の、わが国の鄭成功の伝記は、たいていこれに拠るものと見てよく、『臺灣鄭氏紀事』もまたこの書に拠るところが多い。この書より以前に、わが国で刊行された鄭成功のことををかなり詳しく伝えたものに、寛文元年（一六六一）の序（鶴飼信之）のある『明清闘記』があり、長崎に伝えられた情報によるもので、だいたいは史実に基づくといっても、漢義体の小説である。これはしかし鄭成功が在世の時ではじめて台湾を占拠した年に出版されている。（『明清闘記』については後述する。）

「内閣文庫」に所蔵している。兼葭堂の死後、幕府が遺族から提出させた兼葭堂舊蔵書籍の中の一部とされる。この本には「兼葭堂蔵書印」のほか「淺草文庫」「昌平坂学問所」「日本政府図書」の蔵書印が押されている。翻刻本では康熙四一年二月の著者、鄭亦都（居仲）の原序（二篇）を省いて、ただ日本人の序（金龍道人）と跋（芥川煥）のみをつけているので、この書の由来などは翻刻本では分らない。謝国楨の『晚明史籍考』に、この書を取りあげているが、原本は見ず日本の翻刻本に拠っている、翻刻本の金龍道人の序文だけを、そのまま転写している。

著者・鄭亦都の序文によると、『鄭成功伝』はもと『明季遠志録』に附録されたものだ。板心に「明季遠志録」とし、その下にやや小字で「島上増伝」としていることでも知られる。「島上」とは台湾島を指すものであろう。この序文によると、『明季遠志録』は「明季辯誤」四卷、『江閩事略』六卷、『明餘行國録』一六卷、『明道民録』一卷から成るといっている。このほかに「増伝」として、『鄭成功伝』を加えたものと考えられる。ところが「明季遠志録」は清の「軍機処」による「禁燬書目」の中に見えるから、一般には餘り流布しなかったのではないかと思われる。そのため謝国楨の『晚明史籍考』にも原本は登載できなかったのであろう。孫耀卿の『清代禁書知見録』に「明季遠志録」二卷（その一部）をあげて、「舊抄本」としているから、やはり原刊本を見ないことが分る。

『晚明史籍考』（巻二）に謝国楨は「明季遠志録」を挙げているが、「日本内閣文庫蔵、『島上附伝』に僅かに序録を附す。全書は未見」（原漢文）といっている。「遠志録」は中国でも殆ど見られなくなっているようだ。謝氏はこの解題に著者の鄭亦都（居中）について、「事實は詳かならず」といっているけれども、一方では巻一三の「鄭成功伝」の解題に、陳壽祺の『東越儒林後伝』を引いて、著者の居仲は漳州・海澄の人で、順治一三年の舉人だが、仕進に淡白で暇を乞うて帰り、白雲山麓に廬を結び「南屏文社」となす」（原漢文）といっているのは前後矛盾しているといわねばならない。しかもこれにつづけて、「字ぶ者、遠く日本に至ってより、日本浪華の木孔恭世爾この書を校す」（原漢文）といっている。これで見ると、鄭亦都の「南屏文社」に学んだものが、この書を日本に齎らし、それを木村兼葭堂が入手して校刊したというものようだ。果してどうであらうか。「字ぶ者、遠く日本に至り云々」は「東越儒林後伝」の記載か、あるいは謝氏自身がこれを補った部分か、私は「東越儒林後伝」を見ていないので判断しかねる。

著者はこの書の序を「徵信序」といっているが、この中でいう「明亡より今に至る六十載に垂んとし、人は往き風は微かに、篤道の君子、留意の人才を以てすると雖も、誤りなき能わず」（原漢文）である。しかし「九州を横歴し、天下と相見ること能わず」であったが、「ただ足跡の至るところ、搜討を忘るるなく、或いは遠方の方正博聞の君子の我と同心の人が、幸に郵筒を賜わり、教ふるに速ばざるを以てす」（原漢文）と。徵信のため、つまり明亡の時の信実を徵するため、苦心努力して史料を捜しあつめ、然る後に退いてその部居を定治す」（原漢文）といっている。この書の記載は信憑性のかなり高いものだといふべきであらう。

「ますだ わたる」  
中国文学者

詩の翻訳について / ランボー研究余滴 7

# 酔いどれ船の出帆

山村嘉己



パリのランボー

(1)

パリ・コンミュンのはあの五月の「血の週間」を最後に悲劇的な幕を閉じた。それがランボーに「見者」の意識という貴重な収穫をもたらしたとしても、そのために受けた彼の心の痛手はなみたくないものではなかった。多くの伝記作家が紹介する五月から八月にかけてのランボーの行動はこのことを十分に証明する。たとえば、ジャン・マリ・カレーはこのようにいう。「ランボーは母親や姉妹たちを、その怒りっぱさで恐れさせ、シャルヴィルの市民どもを、その粗野なだらしなき、饒舌によっていやがらせた。

近所の悪童どもは、汚い服装をし、恐ろしく長い髪を束ねて肩に投げかけ、パイプの口を上に向けてそれに指をかけ、いかにも挑発的な態度をみせている彼が通るのを見ると、アルデンヌでよく人が言っているように「恐水病に罹った」とみて、彼に石など投げつけた。」（『地獄の遍歴者』江口清訳 P75）

これに彼自身がドラエーに報告したあの惨めな恋愛事件を加えてもいい。ある実業家の娘に詩的な恋文をつづって送った彼が、実際に女中につきそわれた娘を前にして、「生まれたばかりの犬の仔のようにキョロキョロと」（同書江口訳）してついに一言もいえなかったという話

だ。これはランボーの純な心に大きな傷を与えた。それ以後、彼が女を愛したという話は一切聞けない。

おお おれのかわいい恋人たちよ、

お前たちがどんなに憎いか

その汚い乳房など一面に

ひっぱたいて痛めてやる

.....

だげどこんな羊みたいな肩

おれは詩にうたったこともあった

け

お前の腰など好きになつて

だから砕いてやりたいんだ

（「おれのかわいい恋人たち」）

これがその恋愛ごっこが彼に残した唯一の土産だった。

しかし、このような外側にあらわれた彼の放埒ぶりにわれわれはそんな驚いていする必要はない。そのような奇行に彼を走らせたその傷あとの深さを、たとえ「ばつきの『盗まれた心』という詩はあますところなく示してくれる。

多くの心はあわれにも 船尾でよだれを流している

ああ 安たばこのしみついた あわれ

なほくの心

そこへ 奴らは スープのげろまで投

げかける

ぼくの心はあわれにも 船尾でよだれ  
を流している

どつと声をそろえて 笑いこけ

奴らのはきかける悪口雑言 その中で  
ぼくの心はあわれにも 船尾でよだれ  
を流している

ああ 安たばこのしみついた あわれ  
なぼくの心

きわどくくつていやらしく やたら騒々

しい奴らの悪口

そいつがぼくの心をどろどろにしちま  
った

舵のところに またまた落書

きわどくくつていやらしく やたら騒々

しい落書だ

ああ アブラカダブラの波よ

ぼくの心をひつつかみ さつと洗つて

ほしいもの

きわどくくつていやらしく やたら騒々

しい奴らの悪口

そいつがぼくの心をどろどろにしちま  
った

奴らかたばこをかみ終つたそのときは

おい 盗まれたぼくの心よ いったい

どうすればいいの

酒くさいしゃっくりが追ってくるんじ

やないか

奴らかたばこをかみ終つたそのときは

ぼくは胃まで痛むだろう  
ぼくが ぼくの心が こんなに汚れっ  
ちまつては

奴らかたばこをかみ終つたそのときは  
おい 盗まれた心よ いったいどうす  
ればいいの

ここにしみ出る怨恨ともいふべき鬱  
屈感、この詩にたいするいろいろな解  
釈を呼びおこした。パリ・コンミュニ

ン中にかはれは男色の対象になった。そのと  
きの屈辱感がここにあるという人たちも  
いる。しかし、かれのコンミュニ直接  
参加が明確でないことがはつきりしてい

る以上、この解釈に肯くことはできない。  
いや、たとえ事実関係がそうであつたと  
しても、ここで大切なのは、とにかくラ

ンボーがこの事件で深く傷ついたことで  
あり、それにして深く問題なのは、その  
怨恨をかれがいかに堅牢な詩形式のなか  
に盛り込んでいるかということである。

この詩はそれぞれ八行からなるが、一  
行目の詩句が四・七行目にくり返しあら  
われ、二行目が八行目に再現され、さら

に一・二行と七・八行が同形式で全体を  
抱擁するように包みこんでいることに注  
意したい。これは *rhyme* といつて、

シャンソンのように歌いあげるのに適し  
た形式だといふ。この形式と内容との微  
妙な食いちがいをランボーはきわめて意

識的に利用しているようにわたしには  
思われてならない。それは「母音」とい  
う詩が一見きわめて飛びはなれたイメー

ジを羅列しているように見えながら、じ  
つに適確な論理の糸をつむいでいること  
を想起すれば、あながちこじつけとはい  
えない。「母音」の内容については拙

稿「ランボーの *Voix* について」(関  
大仏語 仏文学 8) に詳しくのべている。

いや、もつと押し進めていえば、この外  
面的生活の放埒や破壊的態度と、内面的  
世界の統一と形式への配慮との間の微妙  
な橋渡りこそが、まさしくランボーの見  
者理論の実践だったといえはしないか。

たとえば、この「盗まれた心」は師イ  
ザンバールに「処刑された心」と題して  
送られているが、その文中で自ら「こ  
れはいつたい諷刺でしょうか。それとも

詩なんでしょうか。いや、やつぱり幻想  
(*Fantaisie*) でしょうね」といひ、  
さらに最後に「*Canne vent pastien*  
*dire*。(何もごつていない) もりはない」

とさりげなくつけ加えてくる。(じつはこ  
の部分には長句 *Canne vent rien dire*。  
(何かをいおうと思つているんじやない)  
と誤り伝えられて、意味がまるで反対に

なつていたところである。つまり、ラン  
ボーの痛烈な皮肉がむしろ素直な心惜告

白のように誤り伝えられることになつた  
ので、だからこの微妙なランボーの挑戦

をつかみそこねたイザンバールは「君の  
その見者の理論とやら」といふしよに、博  
物館の怪物みたいに、びんに入れられて

お陀仏しないように気をつけるんだね」  
と、さも余裕ありげに返事を出し、「処  
刑された心」は「胸のむかつくような」

作品と断じ、「こんな馬鹿げた作品ならだ  
れでも書けるという証拠に、自作の、そ  
れこそ馬鹿げた詩」臭いやつらのミュー

ズを同封している。ここにおいて、か  
つてあれほどはげしく求め合つたこの師  
弟は完全に他人として対立することにな  
る。完全な「教授団の一人」になり切っ

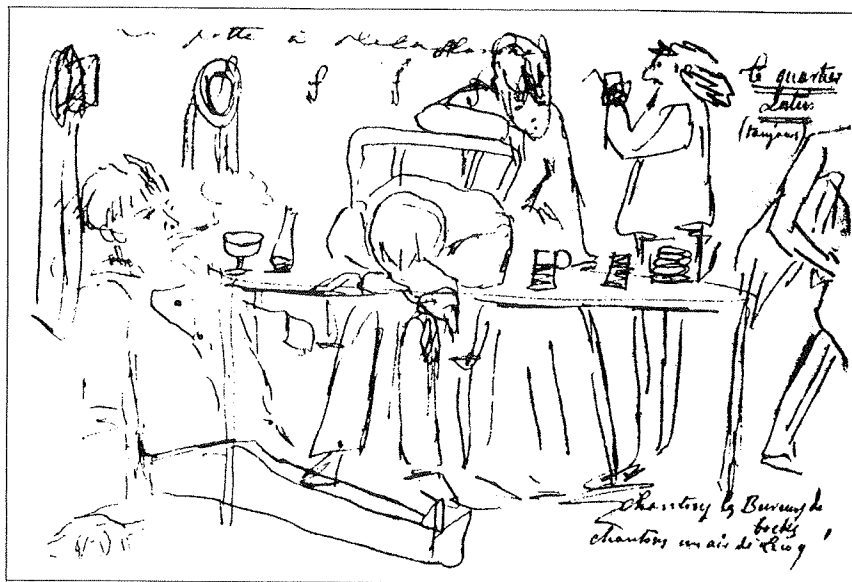
てしまつたイザンバールに、ランボーの  
身を切るような見者の生きざまはもはや  
理解の域外になつてしまつたといふべき  
であらうか。しかし、この「盗まれた心」

の鬱屈感を見逃すようでは「酔いどれ船」  
の壮大な構成とそこに盛り込まれる切実な心  
惜告白とが把握できるはずはない。だから

イザンバールは「酔いどれ船」をたん  
なる幻想 (*Vision*) の産物と見なし、  
*Visionnaire* ランボーの姿を喧伝する  
ことに努めることになる。

(2)

これに対して *Noter* という批評家は、  
イザンバールが「盗まれた心」と「酔い  
どれ船」を「母への反抗」という基調に



ラテン区のランボー（机の下か？）ヌーヴォー筆

おいて並置してとらえた点は卓見であると認めながら、この二つの作品はたしかに同じ八外傷Vの傷あとの表現としてもその傷を与えたものはパリでの思わしい体験にはかならない。ただ、「盗まれた心」がその直接の表出であるのに対し、「酔いどれ船」は同じ原因から生じながらすでに「方向を変えられ」、さらに文学的に敷衍されたものになっていると説明する。「酔いどれ船」、つまりランボーは、先ず船出することに酔い、曳き手もなく、積荷もなく、流れのままに漂うことに酔いしれる。彼は歓喜の声をあげて踊り狂う。

嵐はぼくの波の上の目ざめを祝ってくれた

コルク栓よりなお軽く ぼくは波の上  
でおどってみせた

出発にはこのような新鮮な解放感と、つきつき展開される風景への好奇心だけがあつた。だから空をつんざく稲妻も、たつ巻きも見られたし、雪に輝やく緑の夜も見えたのである。しかし、その巡歴の終るころ、この船はなんと苦しい傷ついた心をもっていることか。

おお 波よ 一度お前の倦怠の中におぼれてしまつては

ぼくはもはや 綿運び船の水脈を消す  
こともできず  
誇り高い旗と災の中を横切ることもち  
なわず  
船窓に光る恐しい眼の下をくぐるこ  
もできない

かくて、ランボーの彼の夢にかなつた新しい社会Vの出現はついに実現しなかつた。以後、ランボーにはみだされた幸福感が訪れることはなかつたとNouletは結論する。彼女の意見は「酔いどれ船」の告白性を適確に把握している点できわめて注目し備するものであるが、たとえば彼の夢にかなう新しい社会Vとはいふ何なのか。ランボーがコンミュニオンに期待したものは何なのかが明確にされていないうらみが残ることは否定できない。

すでに何度ものべたように、わたしの考えでは、ランボーにとって Voyant（見者）とはあくまでも Travailleur（労働者）、それもたんなる労働をひさぐものでなく自らの中につねに大義を所有し、そのためには生命をもかけた人のいいでなければならなかつた。彼の労働はもちろん詩作そのものであるが、それはついに「これこそぼくのいる深淵を、時おり 稲妻のように照し出す爆発」（『地獄の季節』「閃光」）にすら



なるほどの全身的作業だったのである。このことを明確にしておかないと、この後のランボーの行動のせっぱつまった緊張感、とくにヴェルレーヌとの壮絶とも名づけられるような愚行の数々はとうてい理解できない。外面的なデカダンの行為よりも、恐らくは本質的に見あやまつたヴェルレーヌという詩精神へのめり込みと、その誤解にかけた彼の全身的な作業にわれわれはもつとつよく注目しなければならぬ。

(3)

さてこのようなランボーの激変の余波をもろにかぶった人にあの *Épique de Bannié* がある。一年ほど前には「わたしに救いの手をさしのべて下さい」とまで願ったこの人に、ランボーは今や冷やかな笑みを浮かべて「花について詩人に語られたこと」という詩を送った。「去年はわたしはやっと十七才でした……進歩したでしょうか」という挑戦めいた手紙をそえて（七月一四日付）。パンヴィルはその詩の中で、百合やすみれやばらなどの花をさかんに用いていたが、ランボーはこの百六〇行にもわたる詩の中でこれらの花々の吸吐を催すような姿をこれでもかこれでもかと羅列する。「不気嫌で肺病やみでこっけいなフランスの

植物」よりも、「海鳥の糞」の方がまだましだと彼はいう。

要するに まんねんこうだろろうが  
百合だろろうが 生きていようと枯れて  
いようと  
花が 海鳥の糞にひとしいだろろうか

この詩を手にしたときのパンヴィルの洗面ぶりは想像にたたくない。しかし、時の詩壇の中心人物にこのような思い切った挑戦状を送ったことは、ランボーのなかにそうでもしなければ収まりのつかない衝動が溢れていたことをはっきり示している。事実、ランボーはこれに先立つこと一月前の六月十日に、親友ドメニーにあててかつて彼あてて送った自分の古い詩全部を焼きすてるように要請している。

「焼いてください、ぼくがそれを望むのです。ぼくはあなたが死者の意志と同様にぼくの意志を尊重してくれるものと信じています。ドウエ滞在中に愚かにもぼくがあなたにお渡しした詩を全部焼いてください。」

ドメニーはランボーの意志に反して彼の詩稿を焼却しなかった。そのためかわれわれは幸にもランボーの初期詩篇の多くを現在鑑賞することができる。ドメニーの不実はわれわれに貴重な遺産をもたら



マルレーヌ / エルンスト

らしたのである。もつともこのことはランボーが初期詩篇のすべてを否定していたことの証拠にはならない。Nouveauなどの研究家が示すところによれば、ランボーは「見者」の立場に立って自分の詩の総点検を行っており、「七才の詩人たち」などには明らかに改訂を加えたあとがあるとのとべている。したがって彼が詩の最後につけている日付にしも必ずしも制作年月日そのものを示すのではなく、改変し清書をしたときの日付を示している場合もありうるのである。このことは今でも問題になっている「地獄の季節」と「イリュミナション」の制作順序の解釈についても重要な意味をもつことにな

るが、機会を改めてふれることにしたい。要するにランボーは激しい反抗の姿勢によって自らの新しい立場を人びとの目に見えるように主張しながら、ひそかに何者も試みたことのない未開の詩法の開拓に余念がなかった。この激しい実験の結果が、「花について詩人に語られたこと」であり、「酔いどれ船」でもあった。この新しい詩をだれかに示さねばならない。パンヴィルのように手垢にまみれた既製の詩篇のなかに埋没している人ではなく、彼のこの感受性を正面から受けとめてくれる真に詩人の名に価するだれかに。この時、年長の友人ブルターニュがヴェルレーヌの名を口にした。ランボーもすず

にこの詩人の『醜なるうたげ』を読んで感動を受けていた。彼は早速筆をとって、自分の理想も怒りも、倦怠も熱情もそのすべてを投げこんだ長い手紙をヴェルレーヌあてに送った。ブルターニュがいて、ねいな追伸をかきそえた。焦燥と不安の二週間の後、ランボーは好意と期待にみちたヴェルレーヌの手紙を受けとることになる。ヴェルレーヌはついに、「来たれ偉大なる魂よ、君を待ち受け、君を望む」とまで書き送ってきた。

(4)

敬愛する詩人からのこのような招聘を



友人 ドラエー

受けては、ランボーは一刻もじっとしてゐることはできなかった。今度こそ、彼は放浪者としてでなく、一人前の旅行者として「自由な、そしてぼくの好きな」パリへ出かけようとしたのであった。母は相変らず「スーもくれはしなかったが、それでも新しい服を買ってくれた。あの絶対的な極端の世界だった母とシャルルヴィルにこれに本当におさらばができる。この畏友ランボーの出發前夜の興奮ぶりをドラエーはつぎのように美しくつづっている。

「出發の前夜、ランボーはシャルルヴィル附近で最後の散歩をしようと欲した。それは、一八七一年の九月のことだった。



テオドール・ド・バンヴィル

月は皎々と、柔らかな光を投げかけていた。空気はさわやかで気持ちよく暖かく、希望に胸ふくらむ思いだった。ほくたくは、森のふちに腰をおろした。すると、ランボーがいった。「これがあちへ行って、あの人たちに持って行こうと思つて作ったものさ」と。そして彼は、『酔いどれ船』を読んでくれた。この目くるめくばかりの驚異を耳にして、彼が文学界に与えるにちがいない、みんなをあつと言わせるようなパリ入りを前もって祝福した。「ジャン・マリ・カレ引用（江口清訳）による」

しかし、この親友との希望に溢れた別れの瞬間にも、ランボーは憧れのパリで出会うにちがいない蹉つた数々を不安げに予感していた。「ぶきつちよで臆病なおれは、話すこともできないだろう。頭の中ではおれは、だれもこわい者なんではない、だが、おれはいいんだい、あそこ、どんなことをしたらいいんだ。」（同上）この不安はみごと適申した。ヴェルレーヌの家にころがり込んだランボーはつぎつぎとスキヤンダルをまき起し、ついでヴェルレーヌと手を取り合つてあの『地獄の放浪』に旅立たねばならなくなる。これらの体験がランボーに何をもたらしたのか。そこで見るランボーは、詩人ランボーはいかに変貌して行くのか。このことは回を改めて詳しくのべてみた

い。  
(なお弁解してみた言い草だが、今回は身近に不慮の出来事が重なり十分意をつくした文章をかくことができなかった。とくに『酔いどれ船』の構成をもっと詳しく分析し、その内的論理の一貫性と、告白的要素とを明示したかったのであるがうまく果せなかった。他日稿を改めて考察してみたい。)

やまむら よしみ  
（仏文学者）

日本婦人問題資料集成

⑤ 湯沢雅彦 / 編  
⑥ 丸岡秀子 / 編

周知のように、昨年は「国際婦人年」にあたり、女性解放運動がもりあがった。婦人問題、とりわけ人間尊重・人権確立の問題は、日本近代史一〇〇年のあり方を根底から映した重要ななかめである。

本シリーズはまさに、婦人問題に関する膨大な諸資料を体制側・反体制側を問わず、草の根にいたるまでも、博搜・収集・整理して日本の黎明期から現代までの社会の底流に位置する婦人問題の歴史的事実の体系化・理論化を狙っている。  
(下メス出版・九〇〇〇円/八五〇〇円)

ローザ・ルクセンブルグ

ヨギヘスへの手紙 1

伊藤・米川・阪東 訳

ローザとヨギヘスは単なる夫婦ではなく、彼らは緊密にむすばれた革命家であった。したがって、夫婦関係の破局後も同志としての関係はいささかも解体せず、ドイツ革命の渦中における、あいつぐ二

人の死まで続くことになるのである。本書は、こうした二人の夫婦として、そして同志としての年月の中で、幸いにし、今日に残されることになった約20年間、つまり一八九三年より一九一四年までの間に書かれたローザのヨギヘスあての手紙を集録したものである。  
(河出書房新社・三五〇〇円)

重いくびきの下で

F・ジュリアン 著

ノルデステと呼ばれるブラジルの北東部は、「ブラジルの恥部」ともいふべき後進農業地域である。そこでは飢餓・貧困・疾病・失明・売春・難民などの社会問題が山積し、その対策と克服がブラジルの解決すべき重要課題とされている。著者は、このノルデステの出身であることから、よりいっそうノルデステの後進性や社会問題の実態をえぐる筆致は鋭く、なまなましい。  
(岩波新書・二二〇〇円)

インドの歌

森本達雄 編訳

苛酷な植民地支配のもとに「飼いならされた服従」を生き、やっと勝ちとった自由も、インドとパキスタンの分離独立というかたちとなり、さらにパキスタンは東西に分裂、バングラデシュの誕生を迎えたインド。多様な言語生活、宗教的、社会的、経済的苦悩をかかえながら人類の未来を見すえようとするインド。そのようなインドの詩人たちの自由への闘争の苦闘が民族の鼓動として我々の魂の奥深くひびいてくる書である。  
(法政大学出版局・一六〇〇円)

遊撃的マスコミ論

丸山邦男 著

著者は15年にもわたる叩き屋として、長征開始以来の「天皇制」と権威主義的イデオログ、ジャーナリズムが形成する世論と戦い続けている。つまりは、われわれがどっぷりと浸っている大日本帝

国の内敵そのものである。

流行に乗りやすいアクロバットのな評論家が輩出し、マスコミに持ち上げられ、捨てられる中で常に偉大な常識とでも言うべき民衆的批判の表現家であり続けた著者をあらためて知らされる著作である。  
(創樹社・一五〇〇円)

朝鮮の統一と人権

上田誠吉 / 藤島宇内 / 編著

本書は朝鮮民主主義人民共和国の統一政策、朝鮮の分裂と統一をめぐる国際法史的な分析、アメリカ主導下の国際連合の朝鮮問題への介入、南朝鮮における民主主義と人権の回復、さらに在日朝鮮人の人権問題という問題意識のもとに編集されたものである。各著者が互いに、朝鮮の自主的・平和的統一を支持し、南朝鮮における人権の回復と在日朝鮮人の人権をもとめるという共通した方向性を持ち、それぞれ独自の立場から追求する。  
(合同出版・一四〇〇円)

## 天皇制国家と 在日朝鮮人

朴慶植 著

日本帝国主義を把握する場合、天皇制の問題をぬきにしては考えられない、しかし、これが最も象徴的に具現されている植民地朝鮮支配についての究明は、日本人にとっての日本帝国主義天皇支配の告発が、朝鮮人にとっての告発に比べてはるかに重要であるにもかかわらず、これまで非常におろそかにされてきた。

本書は、この問題、とくに在日朝鮮人支配に関する筆者の最近の論文をあつめ「内なる天皇制」の告発と並行して論じられている。

(社会評論社・一三〇〇円)

## 幻視の鏡

月村敏行 著

本書は四部一七編のエッセーから成り立っている、第一部八幻視の鏡Vでは鈴木志郎康論、田村雅之論などからなり本集の骨子をなし、第二部八村上一郎の死V三篇の文意中、「附言ひとつ」にいたっては、なにをかわんや、の感をまめがれない。その他、第三部八私的な文章

からV、第四部八他人の著作Vとからなる。

(国文社・二〇〇〇円)

## 天皇と昭和史 上・下

ねずまさし 著

天皇制国家の大元師・主権者天皇裕仁を除外して昭和史を語ることはできない。昭和の諸事件のなかで天皇は何をどう決断し、また決断しなかったのか。

豊富な資料を駆使して天皇の政治的行動を歴史的に明らかにし、昭和史における天皇の意味を問う。

(三一新書・各四八〇円)

## 夢野久作の日記

杉山龍丸 編

本書にみられる顕著な印象の第一は、父茂丸の影がなによりも色濃いということである。いわば、父茂丸は久作にとって、常に空間的超越の表象であった。久作はあくまでも恭順にこの表象を遇し、あくまでもやさしく愛をこめて、これを葬った。それは、しかし、久作がたどるべき道筋とは全くちがったものだったのである。

久作には政治による越境の回路は閉じられていた。久作は文弱のゴミとして自己を認識していたのではないだろうか。久作の日記や日常生活がひびかせる「火車の音」は、この自覚と意地の、もつとも抑制された表現なのである。

(晋書房・三五〇〇円)

## 気狂いゴダール

M・ヴィアネイ 著

本書は、ミシェル・ヴィアネイという作家が、ジャン・リュック・ゴダールの映画づくりを「自分の言葉のなかに捉えこもうとしたもの」である。彼はフットワークよく、言葉と映像をたのしみながら、あくまで明晰にゴダールを追求してゆく。

この本におけるゴダールは多く悲哀のヴェールをかぶって描かれている憂い顔の騎士、それはゴダールをめぐるゴジックレベルの描かれかたに似ていると言えなくもない、しかし、訳者が映画作家だったからこそ微妙な現場の雰囲気伝わったと思うのである。

(三一書房・一八〇〇円)

## 社会主義運動半生記

山辺健太郎 著

一九〇五年に生まれた著者が四五年の日常敗北後府中刑務所を出獄するまでの半生を描いたものが本書である。

著者には、彼の活動や学術的著作をめぐって数多くの批判があるが、それらは特に四五年以降の時期に属している、その意味では「半生記」が戦後期から今日に及んだ時、当然、避けて通れないものが多々ある訳だが、本書は戦前期時代の現認者の証言という意味があろう。

(岩波新書・二八〇円)

## ジャーナリズムと

その敵

鈴木均 著

日共によるマスコミ批判や福田恒存をはじめとする右からの新聞批判の横行という状況をバネにして書かれ、「文化の退廃とは何か日本共産党のマスコミ論批判」としてまとめられた項である。宮本のテレビ批判を批判するにあたって「教師聖域論」とも関連させ、日共のいう「真に民主的な」とか「健全な」等の内容の全くない、欺瞞性を暴きたてている。

(芸文出版社・一五〇〇円)

### 熱ある方位

北川 透著

本書の冒頭のアフォリズム「熱ある方位」は、彼の出生や生いたちと不可分の方位を持ち、エッセイ『幻野の滔き』から詩集『反河のはじまり』へと続く河と魚のイメージを基底にした重層する情念の渦巻く根拠としての「風土」の弁証法にすぐれた比喩的エネルギーを抽出したこの評論集で最も出色のものは中江俊夫について触れた文章である。彼の『語集』への批評は北川流における反アカデミズムの根拠であり、そこで北川は「自己異相」の戦場的な噴出の様相にほとんど戦しように自己を正わている。

(思潮社・一五〇〇円)

### 華北根拠地の文学運動

秋吉久紀夫 著

中国文学運動の流れを、一九二〇年代後半期の革命文学の主張から上海、江西ソウエト、陝北ソウエト、そして華北根拠地におよぶ時代に農民・労働者への文学か、農民・労働者からの文学か——と

いう二つのコースが並行線を描いてきたとして、それが華北根拠地にいたって文学大衆化の担い手の確かな出現を得、それを背景として「延安文芸座談会での講和」が生まれた、という。そして、文化大革命を含む解放後の文学の類型は抗日戦期の華北根拠地の文学運動にあるとしているのが本書である。

(評論社・三二〇〇円)

### 仮説実験授業と

### 認識の理論

庄司和晃 著

仮説実験授業は教育論、あるいは認識論を「哲学」としてでなく「実験科学」として提示する、これが最大の特徴である。

本書のサブタイトルは「三段階連関理論の創造」であり、著者が仮説実験授業の理論と実践をもとにとらえた「科学的認識の成立過程の論理」と「コトワザの論理」の追求とから生みだした認識理論である。この理論が本書の構成にも意識的に適用され読む人は無意識のうちに、この「認識の理論」を具体的に理解できであろう。

(季節社・三三〇〇円)

### 地図にない町

フリリップ・K・ディック著

本書は、ラブ・ロマンスや宇宙といったいわば、無時間、的なテーマにほとんど触れていない点でSFやアドルトファンタジー読者のためのものではない。なぜなら、この短編集にみみざる緊張感第二次大戦や朝鮮戦争の影を映す「次の戦争」への不安であり、いっぽう、そうした半ば避けがたい悲劇に対する人々の狼狽と恐怖が、ディックの描く鋭い短編小説に奇妙に漂っている市民的感傷の源になっているからである。

(早川書房・三三〇〇円)

### 「社会科学」から社会学へ

宇賀博 著

新しい社会学は、これまでの機能主義的社会学のインフラストラクチャー——すなわち、人間と社会をとらえる視点——を再検討するなかで、ヒューマニズムをその基礎におく社会学論の構築をめざしているが、より人間的な社会を、コミュニティおよびアンシエーションを構成単位とする分権的モデルのうちにとらえ

ようとする視角は、宇賀氏のこの著書のかなかにもうけつがれている。

前著の『社会学的なロマン主義』（一九七一年）に続いて、一九世紀のアメリカ社会学を思想的にとらえなおそうとした本書は、この意味で、その地味な表題にもかかわらず、社会学をめぐる思想状況のかわり、社会学をめぐり思想状況な問題意識を内包しているといえよう。

(恒星社厚生閣・三〇〇〇円)

### 金芝河

室謙二編

本書は、金芝河を助ける目的で編集されたわけでも、金芝河についての解説、入門というものはけっしてない。金芝河が我々のかかえている問題について、どういう意味を持つのか、ということについて書かれているのである。

軟禁中の金芝河に会いに行った鶴見俊輔、真継伸彦ら、金芝河らを助ける会を中心とした二人の文章からなり、それは、それぞれの立場から多様に金芝河に接近し、かつ金芝河から手をさしのべてもらっているところから成立している。

(三一書房・四八〇円)

# お知らせ——編集委員募集●投稿募集

## ●編集委員募集

書評運動は、生協運動の一環としての文化・教育活動として発展してきました。私たちは、現在『書評』誌の定期刊行・講演会活動などを通じて広範な文化・思想運動を展開し、さらにこれらの運動の拡大・発展をめざしています。そして、現在、書評活動の中心となるべき編集委員の組織的な強化が期待されています。

文化活動・思想運動の必要性を感じている人、雑誌の編集作業に興味のある人、さらに、講演会活動等に関心を持ち、自ら、学内における文化活動をしたいと思っている人、書評編集委員会に結集しよう。われわれは、諸君に『書評』誌という自由で創造的な活動の場を提供します。なお、若干の活動費が支給されます。生協本館三階・組織部内書評編集委員会まで直接おいで下さい。

## ●投稿募集

最近読んだ本の書評・内容紹介・批判等の作業を通じて、自己の主張を述べたもの・現状分析・研究成果の発表・論文・エッセイ等どのようなものでも結構です。

詳細については書評編集委員会まで直接お問い合わせ下さい。

投稿規定は以下の通りです。

▽原稿は原則として縦書きで、一行一八字、一〇行（一八〇字）を一枚と計算します。市販の四〇〇字詰原稿用紙を使用される場合は、下二段を使用せず、三六〇字詰とし、二枚として計算して下さい。枚数は自由です。なお、必要な場合にはこちらから原稿用紙を提供します。

▽原稿には住所・氏名・その他学部・電話番号等、連絡先を詳しく銘記して下さい。

▽原稿は一切返却しません。必要な場合にはコピーをとっておいて下さい。また、原稿の採否に関する御問い合わせには一切応じませんが、採用分にはこちらから連絡します。

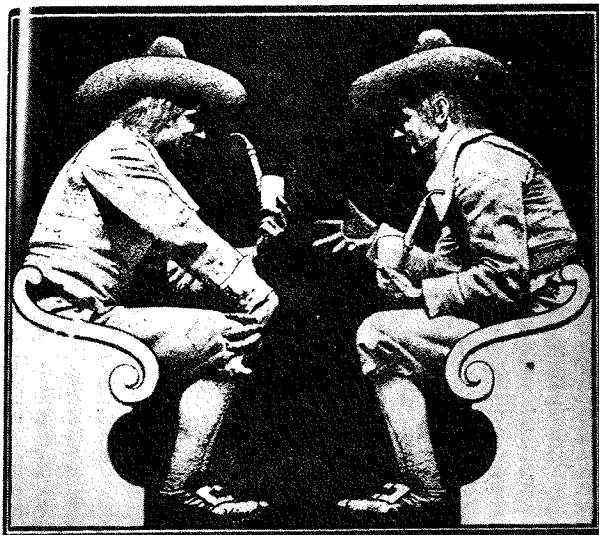
▽採用文には、参考資料代として、三〇〇円以内の書籍を献本させていただきます。

▽送り先

〒 565 吹田市千里山東三一〇

一 関西大学生生活協同組合「書評」編集委員会 卍(06) 388-111

21 内線776



昔ばなし / マックスフィールド・パリッシュ



脱出／マックスフィールド・パリッシュ

## 編集後記

私たちは、今回「教育問題」に関する特集をくみ、編集活動を進めてきました。しかし、書評編集委員会内部における組織力の不充分性のため「書評」誌の発行が予定よりかなり遅れてしまったことをお詫びしなければなりません。しかも、特集とは名ばかりで私たち自身満足のゆくものではなく、その点についても読者の方々からの御批判等もあります。そのような批判・助言を通じて読者自身が書評活動に積極的に参加されることを心から希望します。

私たちはこれまでの「書評」誌のあり方について批判的な立場にたち、現在、何が私たち編集委員に問われているのか、また、どのような問題意識をもち、提起してゆかねばならないのかを模索するなかで、関西大学の一学生として、さらに現代を生きる若者として、あらゆる社会の矛盾をはっきりと見きわめ、その矛盾から目をそらさず、問題解決にむけて自己を変革し成長させなければならぬのではないだろうか。いまだ私たちは未熟であるけれども、常に、その姿勢をくずさず、「書評」誌という場において、より広範な文化・思想活動を展開してゆきたいと思えます。

1976年11月号 通巻 第45号

編集・発行 関西大学生生活協同組合・組織部「書評」編集委員会  
連絡先 吹田市千里山東3-10-1 (☎ 388-1121 内線 776)  
頒 価 250円